
RED

ロビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED

【Zコード】

N3420V

【作者名】

ロビー

【あらすじ】

意志の力『意志^{ウイル}』が存在する異世界アース。

大戦と呼ばれる長く続く争いの時代の終わりに『魔人』と呼ばれる異形が現れ、大陸は恐怖のどん底に陥っていた。

しかし、何処からか現れた赤髪の青年の犠牲により、魔人は倒され、大陸に平穏が訪れた。

月日は流れ、100年。

大陸中央アーカシティから物語は始まる。

以前書いたものの設定を変えて、再掲載しています。

第0話 英雄と魔人

我々が住む世界とは異なる別次元の世界 アース。

1つの大陸と、僅かな島々によつて成り立つこの世界の人々には不可思議な力があつた。

己の意志の力を操る力。

ある者は腕に意志を集中させることで大岩を砕き、ある者は足に意志を集中させることで馬よりも速く駆け抜け、ある者は武器に意志を伝わらせることで武器の力をより強固な物とした。

いつしか、人々はその力を意志^{ウイル}と呼ぶ様になつた。

その力は人々の暮らしを大きく変えた 人の心さえも。

力を善に使う者も居れば、悪に使う者も居る。

いや、悪の方が圧倒的に多いだろう。

一度、悪に傾けば善に戻ることは難しい。

特に為政者達にとって、この力は使わざには居られなかつた。

支配欲の為に。

意力を使つた戦争 大戦。

常識を越えた力のぶつかり合いにより、大陸を統治していた大小様々な国家が地図から名前を消した。

人々は恐怖した。

己の内にある意志が、簡単に一国を滅ぼすこと。

それでも、戦いは終わらなかつた。

強大な力に溺れた為政者達の欲は、留まることを知らなかつた。

終わらぬ悪夢。

苦しむ、力無き人々。

荒廃していく大陸。

転機が訪れたのは、突然だつた。

大陸後期 大陸が3つの大国に支配される様になつて暫く過ぎた頃。

悲劇は大陸西側から始まつた。

西側を支配する大国が僅か一晩で壊滅。

国の頂点 支配層は全滅。

調査に向かつた二大国の調査団が見たもの
果てたかつての敵対国と、恐怖に慄く民衆。
無残な姿に変わり

民衆の殆どが恐慌状態だつた。

田の当たりにした『恐怖』で、精神に異常を来たしていた。

根強く事態の真相を調査する調査団は、比較的に恐慌状態が治まつた1人の老人の口からある情報を齎された。

黒い 誰が見ても理解出来る、黒い光を纏う男が何処からか出現したといつ。

黒い光 それは意力だつた。

意力の強さは個人によって異なるが 身体から放たれる色は常に白いとされていた。

だが、男の纏うのは黒い意力。

明らかに、従来の意力には無い異質な『何か』を感じさせた。

男が向かつたのは、国の中核。

つまり、支配層が居る王城だった。

老人はそこまで話すと、身震いし始める。

どうやら、その後のことは口にするだけでも恐ろしいのか、話してくれなかつた。

調査団はこれ以上の追及を諦め、去らうとした。

去りゆく調査団に対し、震える老人は最後にこう言つた。

「自分達の國のお偉いさんも、あんた等のお偉いさんも鬼だつた。人を踏み台にすることしか考えていない鬼だ。だが、あの黒い男はそんな鬼すら超える魔人だ」

魔人。

名前の分からぬ黒い意力を持つ男は、そう呼ばれことになる。

魔人討つべし 　　いがみ合つていた二大国は自先の脅威を打ち倒すべく、手を結ぶことにした。

國の代表者達は、早速自國でも指折りの戦士達を集めた。

いざれも強い意力を持つた猛者の集まり。

如何に強大な意力を持つ相手でも、迎え撃つのは二大国によつて構成された精銳100人の連合部隊。

為政者達は勝利を確信した。

だが、その期待は裏切ることになる。

部隊結成から数日後、連合部隊が魔人らしき男を発見。

その情報が一国に伝わった。

連合部隊の中には、戦場の映像を送る通信兵も同行していた。

カメラから送られて来た映像に、魔人と思わしき男は確かに映っていた。

情報通りに黒い意力を纏っている。

年齢は20代 真白い髪と黒い肌という正反対の色を併せ持つ。

しかし、それ以上に注目すべき点があった。

目だ。

魔人らしき男の目は、常人とは明らかに違う。

眼球がどす黒く、瞳の部分は真っ赤な まるで血の様な色。

映像を見ていた何人かは、その異形の姿に吐き気を感じた。

ここではない、遠距離から送られてきた映像に映っているだけの存在でしかない。

それにも関わらず、吐き気を感じる程の重圧が襲ってきていくのだ。

通信兵から連絡が入る。

連合部隊 攻撃開始。

二大国の腕利きの猛者達が魔人を包囲する。

魔人は、その場から動こうともしない。

猛者達から、一斉に意力が放たれた。

いずれも常人が受ければ、原型を留めない肉の塊に変える威力を誇る。

常人ならば、だ。

相手は常人では無い 魔人。

意力は、魔人に全て直撃した。

衝撃で砂煙が舞う。

映像越しの執政者達が、ほくそ笑む。

その顔が恐怖に歪むのに、時間は必要無かつた。

砂煙が、突然の突風で搔き消され 同時に連合部隊の10人の首も消えた。

否、消えたのではない。

時間を置いて、何かが上空から落ちて来る。

首だ。

連合部隊の精銳10人の首。

砂煙が晴れた先には、両手を血に染めた魔人の姿があつた。

魔人は笑っていた。

その笑みは 人によつてはまるでまるで無邪氣な子供の笑顔にさえ見える。

戦慄が、現場と映像が送られてくる側の両方に奔つた。

連合部隊の1人が突撃する。

声を上げながら、後先考えずに。

彼は目の前で起きた恐怖に、完全に我を忘れていた。

突撃した彼は、魔人に向かつてありつたけの意力を込めた剣を振り下ろした。

激しい音が聞こえ 剣が粉々に砕けた。

魔人には傷一つ無かつた。

魔人が突撃した精銳の顔を指先で弾いた。

鈍い音が聞こえて、彼の頭は弾け飛んだ。

頭を失つた身体はそのまま地に伏した。

その光景を見た連合部隊の精銳達は叫び声の様な悲鳴が上げ、魔人から離れていく。

その姿はもはや精銳ではない、唯一の一般人と大差が無い。

魔人が彼等を逃がす筈が無かつた。

通信兵から送られてくる映像には、恐怖に顔を歪めながら虐殺される精銳達の姿が映し出される。

映像を送っていた通信兵も耐え切れず、とうとうカメラを捨てて逃げ出した。

カメラは地面に落ち映像が途切れなくなる。

最後に通信兵の断末魔の叫びが聞こえたところで、完全に通信は途絶えた。

通信が流れてきた側　　為政者達は既に居なかつた。

彼等は逃げ出すことを決意したのだ。

國も民も捨てて　　己の保身だけの為に。

国のトップが消え、二大国が混沌と化すのに時間は掛からなかつた。

大戦末期 三大国事実上の瓦解。

その真相は魔人に恐れをなした為政者達の逃亡」といつ、あまりにも身勝手極まりない行為が原因だった。

混乱する両国に、魔人は当然の様に現れた。

誰もが恐怖に震える。

笑みを浮かべながら、魔人は民衆達にゆっくりと近付いてくる。

一歩、二歩。

逃れようの無い結末が、近付いてくる。

逃げることなど適わない。

逃げても無駄だと頭が先に理解していた。

受け入れるしかない、死という結末を。

だが、その結末は訪れなかつた。

魔人の行く手を遮るかのように、1人の青年と1人の少年が歩み出てきた。

青年と真つ向から対峙した瞬間 魔人の笑みが消えた。

青年の顔はよく見えなかつたが、年齢は20代そこそ。

炎の様に赤い髪と真つ白なロングコートは、見る者に強い印象を植え付けた。

少年の方は12歳かそこらといったところか。

魔人を前にしても、何ら気後れしていない。

「奴は俺が止める。早く逃げろ」

青年が人々に呼び掛ける。

魔人が青年に拳を繰り出した。

青年は、魔人の拳を苦も無く受け止めた。

人々の顔が驚愕に変わる。

二大國の連合部隊を虐殺した魔人の拳を、目の前の青年は確かに受

け止めたのだ。

「行け！」

青年の力強い声に押され、人々は逃げ出した。

否 1人だけ逃げ出さない者が居た。

青年の連れの少年だ。

少年はある程度離れた場所まで退避し、魔人と青年の戦いを見ていた。

魔人と青年は拳を繰り出し、ぶつけ合っていた。

一撃ごとに衝撃波が起きる。

少年は逃げ出さなかつた。

この戦いを見届ける姿勢を取つていた。

魔人と互角に渡り合う青年。

どう考へても、常人ではない。

普通ならば、魔人にも劣らぬ恐怖を抱いても無理はない。

だが、彼だけが希望だ。

彼ならあの恐ろしい魔人を倒せるかもしない。

人々は一縷の望みを、名も知らぬ青年に託した。

激闘は3日にも及んだ。

魔人も青年も、息を切らしていた。

周囲は瓦礫に変わり、草木一本見当たらない。

魔人からは黒い意力が、青年からは赤い意力が立ち昇る。
青年のそれも魔人同様に常識ではあり得ない色素の意力。
どちらも完全に人智を越えた膨大な量。

その全てが2人の右腕に集束されていく。

獣の様な咆哮を上げながら、2人は同時に地を蹴つた。

黒と赤の激突。

その瞬間、世界は大きく揺れた。

爆発の様な閃光が起こり、少年は目を閉じた。

何も見えない光だけの世界が、数秒続いた。

やがて、光が収まる。

そこに2人の姿は無かつた。

残つたのは、荒れ果てた街並みと 奈落まで続きそうな深い大穴だつた。

数週間が過ぎ、廃墟同然の街に英雄の同行者だつた少年が現れた。

彼は人々に語つた 魔人はあの人人が倒した、と。

人々は魔人の脅威が消えたことに歓喜した。

名も知らぬ赤髪の青年に感謝した。

彼の尊い犠牲で大陸は救われたのだ。

魔人から大陸を救つた青年は、人々から敬意を込められ『赤き英雄』と呼ばれる様になる。

街は荒れ果てたが、命がある。

人々は新しい生活に向けて歩み出す。

それから更に数ヶ月が過ぎた頃 復興作業をしている人々の前に、ある連中が現れた。

役立たずの為政者達。

魔人が居なくなつたので、再び支配者として姿を見せたのだ。

誰もが彼等を憎悪の瞳で睨んでいた。

憎悪は程なくして殺意へと変化する。

圧政で家族を失つたと大声を上げる青年が、ありつたけの意力を為政者の1人に放つ。

意力を受けた為政者は呆気なく死んだ。

呼応する様に、周囲の人間達も意力を為政者達に放つた。

何もしてくれなかつた癖に。

逃げ出した裏切り者め。

血の粛清が行われた。

身勝手な為政者達の死により、長い長い悪夢の日々
結した。

大戦各地には大小様々な町が相次いで建設。

政治体制は各々の都市や町による自治が主流となつた。

その中の大陸西側レダンシティ、大陸中央アークシティ、大陸東側
グロウシティ。

大陸の中心ともいえるこの三大都市は、大戦の教訓から平和条約を
結んだ。

平和のシンボルとして、アークシティに一つの銅像が建てられた。

赤き英雄の銅像。

この銅像を中心に、平和記念公園も作られた。

月日は流れ、100年。

大戦終結100周年を迎える現在、物語はアークシティから始まる。

第0話 英雄と魔人（後書き）

キャラが殆ど出てないので書き辛かったです（汗）。
次回からメインキャラ登場です。

第1話 邂逅

アークシティ。

大陸中央に栄える大都市。

三大都市の中でも最も発展しており、人や物が多く集まる。

この街は大きく5つの区画に分けられる。

住宅が密集する東区。

商業で賑わう西区。

防衛の要、警備隊の本拠地である南区。

移動の足、空港のある北区。

行政機関、教育機関が集まる中央区。

さて、物語は商業が集う西区から始まる。

大戦終結から数えて100年目にあたる今年。

各都市では100周年を記念して、3日間に渡つて盛大な記念祭が行われている。

今日はその最終日。

アークシティは特に活気に満ちていた。

100年前、この地で繰り広げられた死闘。

今や御伽噺の類とされる、赤き英雄と魔人の戦い。

ここはその戦場跡に作られた都市だ。

無論、観光客も多い。

商業で賑わう西区には当然の様に、人が集中していた。

その中でも、一際人が集中している店がある。

アンダーソン食堂。

食堂にしてはなかなか大きいこの店。

入り口には20人や30人では利かない人数が並んでおり、長蛇の列を作っていた。

「いらっしゃいませー」

入ってきた客に掛けられる声。

声を掛けたのはウェイトレス姿の少女。

年齢は16歳くらいだろう。

銀色の髪と翠の瞳、妖精の様な風貌をしたその少女は男女問わず注

田の町だ。

「アンリさん、これお願ひします」

「はーー」

銀の少女 アンリは、店長から配膳を頼まれる。

甲斐甲斐しく仕事する姿に、誰もが見とれていた。

更に客の列が増える食堂。

そこに 。

「アーン」

「ひゃあー!?」

いきなり後方から、アンリに抱き付く人物。

長い黒髪をポニーテールにした少女。

年齢はアンリと同じくらいか。

「リナちゃん、いきなり抱き付かないでよ~」

「よこではないか、よこではないか~」

リナと呼ばれた少女はスリスリしてくる。

「リナちゃん、アンリちゃん困つてね？」

うら若き乙女2人に声を掛ける男が1人。

ぼやぼやのオレンジ色の髪。

客に見しては、ハンタガはエゴーで、ケビン見れる

と、二人の知り合いか

新方との二三の会合中は併語し接してんが

卷之三

リカのトスの利した声と睨みに即座に立座するオレンジ頭

ハハハ 今日モスカロードですねえ リナちゃん

「なんせ、ハヤシさん」

店長はにこやかな笑みを浮かべながら、料理して
いる。

彼は目の前の光景など、気にも留めていない。

いつものことだからだ。

「ハヤシヤニモドコロに立つてゐる。お嬢さん困つてゐる」

「す、すんませんっス」

オレンジ頭 ジェイは通行妨害になつてゐた模様。

お客様に平謝りする。

アンリは苦笑しながら、2人に尋ねる。

「ところで2人とも、今日はセイバーの仕事だつたんじゃないの？」

「あれくらいちょろいわよ。パバーッと終わらせてきたわ」

「何せ期待の若手コンビツスからね、俺ら」

フフーンと、胸を張る2人。

セイバー。

それは大陸各地の都市や町、村などに支部を持つ治安維持組織である。

分かりやすくていいえば、何でも屋みたひなもので、依頼を受けて成功時に報酬が貰える仕事。

また、セイバーは意力の特殊訓練を受けられる数少ない組織の1つである。

大戦の教訓で、むやみに意力を戦いに使うのは禁止され、治安維持組織以外で学ぶ事は出来ないのだ。

一部では賞金稼ぎと陰口を叩く者もいるが、警備隊と並んで重視される存在である。

一般的に15歳から資格試験を受ける事が可能で、合格すればセイバーになれるのだ。

リナとジェイ　　この2人も1年前に合格してセイバーとなつた。

しかし、アンリは不安を感じていた。

セイバーは仕事上、犯罪者と戦う事も前提としている職業。

殉職する人間も出るのだ。

友人達がそんな危険に関わるのを、アンリは恐れていた。

「頑張るのもいいけど、無理しないでね」

「平気平気。それはそうと……」

リナがアンリの背後に回り込む。

シュルシュルと「う音と共に、アンリのエプロンの紐が解かれた。

「ちよ、リナちゃん？」

「最終日なんだからお出かけよ、お出かけ。アンタの事だからずっとフィリップさんの手伝いしてたんでしょ？」

「それはそただけど……こんな忙しい時間に抜けたら大変じゃない

時間は昼。

一番忙しい時間帯だ。

抜けたらフイリップとて困るに違ひない。

だ
が

いいやいや、大丈夫ですよ。流石に3日連続だと疲れたでしょ？

「え！？ で、でも

「そうですねえ、何かおみやげでも買つてきて下さい。それで手を打ちましゅう。ジトイくん、リナさん、後をよろしく

「「アイサーー！」」

2人はアンリの手を握ると物凄い勢いで引っ張つていつた。

客も啞然とした表情でその様子を眺めていた。

西区、平和記念公園。

赤き英雄の銅像近くのベンチ アンリ達はそこに腰掛けていた。
一通り祭りを楽しんだので、ベンチでまつたりタイムといったところか。

近くには銅像の写真を撮る観光客の姿も見られる。

「相変わらず多いわねえ、英雄さんのファン」

「だつてあの人のおかげで今の二大都市があるみたいなものだし」

「西区の観光スポットつスからねえ」

100年経つた今でも、赤き英雄は人々から尊敬される存在だった。
建てられた銅像には顔が刻まれていないが、これは彼の顔を見た者が誰も居ない為である。

赤き英雄には同行者だった少年が居たが、その少年は忽然と姿を消したといつ。

ゆえに、銅像の英雄には顔が無いのだ。

ある意味この方がいいという声もあるので問題は無い。

「ま、それはそーとして。アーン」

「ちょ！ いへり向でもそれは…」

リナはステイック状のお菓子を口移ししようとして試みる。

恥ずかしい上に同性なので流石に拒むアンリだが、向いつけはお構い無しだ。

「アンリちゃん食べないんスか？ なら、オレが……『ツツォー？』

不埒な真似に走りうとするオレンジ頭に鉄拳が突き刺さった。

地面に倒れるジェイ。

鉄拳を放つたのはもちろんリナ。

身体全身から怒りのオーラが立ち昇っている（笑）。

「何食おうとしてんだ、ツツア まさか、そのままあたしとキスしよつなんて魂胆じやないわよねえ？」

「え、いや、その……」

「返答に迷つた時点でその氣アリと見たアアアアアアアーお仕置き
じやアアアアアアアアアー！…」

「ギャアアアアアアアア…！」

地面に倒れたジェイに容赦なしの蹴りの雨嵐が降り注ぐ。

だが、変化が訪れる。

最初は痛がっていたジェイの顔が変わつてきている。

苦痛に歪んだ顔から、いい笑顔に。

「そんな蹴つちゃダメっスよ！快感に田覚めるつスよオオオオオオ
！」

「とっくに田覚めてんだろーが、このドMオレンジイイイイイイ
！…」

「あはは……」

2人のやり取りを見ながら笑うアンリ。

目は笑つていなが。

不毛な争いが続く中、彼女の視線が赤き英雄の銅像に向けられる。

「（英雄、かあ……そういうば、『の人』も憧れてたな）」

英雄の銅像を見つめながら、アンリは昔の事を思い出していた。

10年ほど前。

アンリは1人の少年と一緒に本を読んでいた。

本には赤い髪の青年が写っていた。

ただし、顔ははつきりと描かれていない。

「おにーちゃん、ここのひとだれ?」

「ここの人は昔この大陸を救つた英雄なんだ」

「えいやー?」

「僕の憧れの人なんだ」

「じゃあ、おにーちゃんがえいやーになつたらアンリもまもつてくれる?」

「もちろん。アンリを守つてあげるよ」

少年は優しく微笑んだ。

「アン? な、何泣いてんの?..」

「...」

意識が今に戻る。

何時の間にか、涙が零れていた。

昔の「」ことを思い出したからかもしれない。

「は、ハンカチ……つて無い...どうしよう...」

「リナちゃん、落ち着いて。別に「」の「」

「「」の「」じゃないわよ...女の涙は海より深いのよ...今すぐハンカチ買って来るから...ジヒイ、アンに変なことすんじゃないわよ！」

「ちよ、ちよっと...」

リナは必死の形相で、その場から駆け出した。

観光客の中には、彼女の形相に腰を抜かすものが居た。

自分の事を『気遣つてくれるのもいいが、あの性格はどうかならないものか。

「リナちゃんも相変わらずっス。アンリちゃんの事になると『あべ』
れだから。オレにもあれくらい優しかったらいの……」

「でもこつも一緒にしょ？信頼してなきゃ別に居なこつて

「優しいフォローありがとうっス！ついでにアンリちゃんの胸で泣
かせて欲しいっス！！」

「いこけど、リナちゃんに血の海に沈められた『ひ御』

「すんません、調子に乗り過ぎましたアアアアアアア……」

血の海とこつ単語にマジで震えるバカーッ。

必死に土座する光景に泣けるアンリ。

それと同時にだつた。

爆発音が聞こえたのは。

「な、何！？」

「爆発！？」

一体、何が起きたのか。

周囲を見回すと

地面に大きな穴が開いている。

地面は大きく抉れ、爆発の被害で怪我をした人が多数倒れていた。

それどころか、中には。

「 つ！」

明らかに死んでいる人間も居た。

肩が震えた。

アンリにとつて死という現象は大きなトラウマだった。

家族を失つた時を思い出させるから。

目の前の景色がグニャグニャと歪む。

意識を手放したくなる。

「アンリちゃん！気をしつかり持つスよ！」

その声に何とか自分を保つた。

肩は震えたまま、汗は噴出していたが。

そこに 。

「アン、ジョイ！」

リナが険しい顔で走つて來た。

容易ならざる事態。

2人が心配になつて急いで戻つて來たのだろう。

「一体、何があつたんスか！？」

「テロリストよ！」

大戦という悲劇の教訓からか、三大都市が誕生してから戦争が起きた経験は無い。

だが、必ずしも平和を望む者ばかりではない。

人間の中には現状を疎む勢力があるのは当然。

三大都市の統治を拒む組織があつても可笑しくは無い。

規模は大小様々だが、テロを起こす組織は多数存在する。

「上に注意して！」

上 空。

そこには、飛行船の姿があつた。

正規の飛行船とは明らかに異なる、武装された飛行船。

飛行船の武装化は都市の防衛組織以外では禁じられている。

あんな物を有するとは、明らかに大きなテロ組織だろう。

先ほどの爆発音も、あれから爆弾の類が投下されたに違いない。

「とにかく避難して！」

「う、うん！」

だが、それは出来なかつた。

そこに響く轟音。

落ちて来たものを見て、背筋が凍り付く。

武装したテロリストだ。

「我々はこの腐った統治体制を改革する使者『デューク』だ！ 抵抗する者は容赦せん！！」

デューク その名は世間でよく知られている。

数多くあるテロ組織の中でも最大の規模を誇る組織。

かつて存在した三大国。

為政者の殆どが血の肃清によって殺されたが、一部の者達は生き残り、その子孫が運営しているとされるのがデュークだ。

テロリスト達は公園内の様々な物を撤去、あるいは破壊し始めた。

「 ！」

アンリの視線に一つの光景が映る。

赤き英雄の銅像が、破壊されようとしていた。

それを見た途端、アンリは走っていた。

「 アン！？」

「 アンリちゃん！？」

彼女の突然の行動を止めようとするが。

今度はリナとジェイの前にテロリスト達が落下して來た。

まるでアンリとの間を通さない壁の様に。

「 邪魔よ、アンタらア！！」

「 ぶつ飛ばす！！」

2人はテロリストに向かっていった。

あれは、『あの人』の憧れの人。

ずっと夢見ていた存在。

幼い頃の自分と『あの人』を繋ぐ絆だった。

今にも破壊されそうな銅像の前にアンリが立ちはだかる。

銅像を守る様に、両手を広げた。

「邪魔だ、小娘！ そんな邪魔な像などいらん！」

「邪魔なんかじゃない！ これは、この人は『あの人』の夢なんだから…！」

「夢だと？ 笑止、我々の築く秩序こそが夢…！」

「そんなの夢じゃない！ ただの妄言よ…！」

「言わせておけば調子に乗るな、小娘があつ…！」

テロリストの拳がアンリを殴り飛ばした。

殴られた衝撃で後ろに飛ばされ、地面に転がるアンリ。

今度こそとばかりにテロリストは銅像の方に 向かえなかつた。

アンリがテロリストの足にしがみ付いてきたのだ。

「させない、絶対に……」

「余ほど死にたいらしいな……」

テロリストの堪忍袋の緒は完全に切れた。

腰に差しているナイフを抜く。

その光景を、リナとジェイも捉えた。

「リナちゃん！」

「分かつてゐるわよーでも、数が多過ぎるーー！」

2人の前に立ちはだかるテロリストの数は30人ほどか。

しかも全員が強固なプロテクターの様な物を装備している。

このままではアンリが殺される。

しかし、そう簡単に助けに行けない。

「やつとあの世にいへーー！」

テロリストのナイフが振り下ろされる。

「アン、逃げてえええええ！」

「へへへおおおおおおおおーー！」

到底間に合わない。

助に、事など出来ぬ筈か無い

逝^フぐ^シの^リ

息が止まらない

卷之三

1

九六

死になくなし

刹那の瞬間、アンリの頭にはあの時の言葉が浮かんでいた。

アソリを立てあけよ『せせん

英雄になつて、自分を守ることを誓つてくれた『あの人』の言葉。

助けて。

無意識に助けを求めていた。

「助けて、お兄ちゃん！」

同時だつた。

辺りに閃光が奔つたのは、

数秒後、光は消える。

「？」

一向に下りて来ない凶刃。

おやおやおやおやと開くとそこにはあつたのは

1人の男の後姿。

炎の様な赤い髪を靡かせた、白いロングコートを纏つた男が立つていた。

それだけではない、男はテロリストのナイフを人差し指と中指だけで止めていた。

「だ、誰！？」

「何処から現れたんスカ！？」

突然の来訪者。

ジェイもリナもただただ驚くしかない。

それはテロリスト達も同様だった。

「一体、誰だあの男は？」

「何だ、貴様…どこから現れた！？」

テロリストは突然現れた男に尋ねるが。

「 」

男は無言のままだ。

「ええい、邪魔だ！…」

テロリストはナイフに力を込める。

そのまま強引に斬ろうとするが動かない。

指2本だけで止められているというのに、ナイフは全く動かないのだ。

と、ナイフを止めている男の指先に白い光が集束される。

「！」、これは「！」

「 意力」

アンリが呆然と呟いた。

意力、それは大戦の発端となつた力。

己の意志を操る能力。

使いこなせば、たつた1人で百人力ともいえる力を得られる。

男は無言のまま、指先を曲げる。

同時に、ナイフが粉々に砕け散つた。

「おのれ！」

武器を失い、今度は素手で向かうテロリスト。

拳が繰り出される。

が、男はやすやすと受け止め そのままテロリストを天高く放
り投げる。

「おおおおおおーー?」

叫び声を上げながら上空に舞うテロリスト。

その更に上。

赤髪の男が出現した。

「 え」

何が起きたか、理解出来なかつた。

何故、この男が自分の上空に居るのか。

その疑問は解けなかつた。

赤髪の男の踵落としがテロリストに叩き込まれる。

「 つ 」

声にならない叫びを上げ、テロリストは地に伏した。

何事も無かつた様に着地する赤髪。

その姿は、その強さは 。

「 英雄 」

そう、アンリには見えた。

あの赤髪の男は、兄が夢見た英雄そのものだつた。

「 何、あれ ？」

「 動きが……まるで見えなかつたつス……」

ジェイもリナも、その場に居たテロリスト達も啞然とした表情で男を見ていた。

男はアンリの前に来た。

よつやくはつあつと男の顔が分かる。

年齢は20代半ばくらいだらうか。

端整だが、精悍さが伝わってくる顔立ち。

青い双眸は、海か空を連想させた。

男が話し掛けてきた。

「おい、あんた。ここは何処だ?」

「え?」、「」はアークシティですけど?」

「アークシティ?」

何か考え込む男。

「あ、あの 助けて頑いて有難うござります。お、お名前を」

「名前……?俺は シオン。シオン・ディアスだ」

赤髪の男 シオンは拳を構えた。

仲間がやられたのを見て、他のテロリストが集まつて来たらしい。

「邪魔だ」

シオンの身体から白い光

意力が立ち昇つた。

テロリスト達は即座に相手の危険性を察知した。

1人が通信機らしき物を使用、何処かに連絡を入れようとした刹那
シオンの姿が消える。

吹っ飛ばされるテロリスト達。

全員が同時に倒れる。

またしても何が起きたか分からない。

アンリはただただ呆然と見ているだけだった。

「アン、大丈夫！？」

リナとジェイが駆け寄つてくる。

アンリはさつき殴られたのだ。

顔が少し腫れ、口元から血が流れていった。

「大した怪我じゃないが、一応医者に見てもらつた方がいいだろ？
医者は何処に居る？」

「え、えっと……近くに病院が」

「案内してくれ」

西区、病院。

テロ被害に遭つたと思われる人間は多く、診察の順番が来るまで時間が掛かつた。

「もう大丈夫だよ。大事に至ることもないだろ？」

「有難うございます」

医者に治療を受け、リナ達もホッとした。

そこに、

「次は俺を診てくれ」

医師の前にすいと現れるシオン。

首を傾げるアンリ達。

彼は何処も怪我をしていない筈だが

。

「診てくれとは？何か病気かね」

「あまり大したことじゃないんだが」

「深刻そこに、彼は言葉を紡ぐ。

「名前と戦い方以外、何も思い出せない」

「　　」　　はー?」　「　　」

トンデモ発言に、シオン以外は揃つて間の抜けた声を上げた。

某所。

『その男』は闇の中に居た。

年齢は16歳くらい。

男と言つよつは少年と呼んだ方がいいか。

何かの装置が設置されたカプセルの中に横たわっている。

そこに……。

「総帥」

長い黒髪を束ねた青年が音も無く現れた。

年齢は20代後半くらいか。

その声を聞いて、少年は重く閉じていた瞼を開いた。

「……状況は？」

「総帥の予定通りです。あの少女が『彼』を召喚する事に成功した模様です」

「長かった……あれから幾星霜。この日を待っていたよ」

総帥と呼ばれた少年は待ち焦がれた存在の出現に、涙を流した。

それはまるで　　遠い昔に離れ離れになつた家族との再会を喜んでいる様にも思える。

やがて涙が止まる。

「それで“あの人”は今どこに？」

「現在、あの少女を含めた4人で病院へ向かった様です」

「そりか……しばらく様子を見よう。下がつていいよ」

「はつ」

黒髪の男は一礼すると、幽鬼の様にその場から消えた。

「さて、と……」

少年は指先を動かす。

その先にはいくつかのボタンがあり、青いボタンを押した。

カプセルが開き、身体を起します。

「……ぐー」

と、急に胸元を押さえる。

頬に脂汗が伝い、全身が震える。

数分が過ぎ、息を切らせながら咳く。

「……もつあまり時間が無い。1年……最悪の場合は数ヶ月が限界
か」

大戦から100年が過ぎた時代。

記憶を失った赤髪の青年が齎すのは果たして……。

第1話 邂逅（後書き）

内容が大分変わりました。
やはり初期からギャグキャラを入れないと、動かしづらいです（笑）
。

第2話 シシ「ミミ」を求める男

テロリスト騒動から一夜明けて とある病院のとある病室。

この病室の患者 シオン・ディアス。

推定年齢23～25歳、身長186cm。

身体的特徴 赤髪、瞳の色は青。

出身地 不明

家族構成 不明。

職業 不明。

追記 現在、記憶喪失。

「これが俺の現状か」

病院のベッドの上で、シオンは溜息を吐いた。

彼には記憶が無かった。

意識が覚醒した時、彼の目に入ったのは振り下ろされてくる凶刃。

それ以前 何をしていたのか分からぬ。

何処から来たのか、家族が居るのかさえも。

憶えているのは自分の名前と、戦い方だけ。

「それせめておき 」

徐にベッド脇のテーブルの上に手を伸ばす。
そこに置いてあるのは本の山だった。

タイトルは様々だが、その中の一つ 『馬鹿でも分かる社会常識』といのうのがあった。

バツやさら單なる記憶喪失で済む事態ではない。

社会常識すら忘れてこらへじ。

「各施設の利用には、IDカードを使用 何だ、それは？」

全く覚えが無い単語に、首を傾げる。

シオンが知らないのは物語の進行上仕方ないので、説明させて頂こう。

この世界は三大都市によって統治されており、各都市の市民にはIDカードが配布されている。

まあ、平たく言えば身分証明証のことである。

これが無いと病院やら銀行などの使用が出来ないのだ。

しかし、この赤髪はその類を全く所有していない上に記憶喪失なのでIDカード 자체を知らない。

「これが無いといかんというワケか。作成には 何か面倒なことをしなきゃならんのか」

何から何まで分からぬ単語だけで、頭が痛くなるシオン。

ええい、戻れ記憶と頭を叩くが効果無し。

「やれやれ」

両手で顔を覆う。

前途多難、それしか頭に浮かばない。

これからどうするか。

そう考へながら、不意に咳く。

「 血の匂いがする」

顔を覆う両手から、そんな匂いがした様な気がした。

他人には分からぬかもしけないが、自分は血生臭い。

記憶を失っているにも関わらず、身体が戦い方を憶えていた。

だから理解出来た　自分が人殺しである、と。

IDカードを持つていないのは、その所為かもしだい。

社会のはみ出し者、犯罪者の類の可能性もある。

「（……とりあえず、時間が経てば記憶も戻るかもしだい。今はそれ任せにしかないか）」

しかし、それ以上に。

今、シオンの魂が叫んでいた。

欲しいと。

「（何故だろうか。無性にて、そつ誰かから無性にツッハリを入れて貰いたい）」

医師の後ろをアンリとフィリップが続いていた。

彼等の目的地はシオンの病室だ。

フィリップはアンリの命の恩人にお見舞いの品として、メロンを持参していた。

「先生、シオンさんはどうなんですか？」

「かなり重症だね。読み書きは問題ないが、それ以外の社会常識が理解出来てないレベルだよ」

重症もいとこりだ。

これから社会復帰に時間が掛かるだろう。

医師はふうっと眉間を押さえながら、深い溜息を吐いた。

この様子から、彼の苦労が良く分かる。

田の下にある隈からして、徹夜でシオンに説明していたに違いない。

医師の鑑とは正に彼の為の言葉だ。

「さ、着いたよ」

シオンの病室前。

医師はノックした。

「シオンくん、入つてもいいかね？」

「ああ」

ぶつきりぱつな声が病室から聞こえる。

3人が入ってきて見たものは、ひたすら読書に集中するシオン。

本のタイトルは『お子様でも分かるルールブック』。

アンリも流石に汗を流した。

状況は聞いてた通り、かなり悪い。

あんなあからさまに人を馬鹿にした様なタイトルの本を読んでる時
点で、彼の今後に一抹の不安を憶えた。

「ふむ。あれは私も昔読んだことがありますね。なかなか面白かつ
たですよ」

「えー?」

叔父も読んだことがあつたらしい が、今は関係無い。

本を読んでいたシオンの視線が来訪者達に向けられる。

「あんたか。何か用か?」

女の子にあんたという呼び方はどうだろうか。

まあ、自己紹介してないから仕方ないかも知れないが。

「昨日は本当に有難うございました。そ、その」

「あ、これを見たわ。昨日はアンリさんが大変お世話になりました」

言葉が詰まつているアンリの横から、フィリップがメロンを差し出す。

だが 。

「そんな物はいらん。それよりもシシ ノリを入れてくれ」

「 は？」 「 」

いきなりシオンが変な事を言い出した。

シシ ノリ。

何故に？

「あの、シホンさん？」

「頼む、誰でもいいからシシ ノリを入れてくれ。このままでは死ぬかもしれん」

「えええええええー？」

何で！…といつ顔に変わるアンリ。

ゼウスでシシ ノリを入れないと死ぬのだ。

アンリは青い顔をして医者に向を直る。

「せ、先生！ツツコミを入れないと死んじゃう病気つてあるんですか！？」

「そんなもの見た事も聞いた事もないよ。シオンくん、いきなり何を言つとるんだね？」

「いや、何が俺の魂の奥底からツツコミを入れて欲しことこつ叫びが」

「……シオンくん、すぐに精密検査を行おう」

「なら、まずツツコミを入れてくれ。でなければ、梃子でも動かん」

真面目な顔でツツコミを要求してくる赤髪。

困った医者はアンリの肩に手を置く。

「すまん、頼む」

「わ、わたしですか！？」

困惑するアンリ。

シオンは真剣な表情で、じーっと見つめてくる。

メッシュヤ期待してゐる。

後には引けない。

フレッシュヤーが圧しかかつて来る。

相手は命の恩人。

意を決して

「何でツツゴミを入れなきやいけないのよ——————！」

バシー・ンとシオンの胸を叩く。

……これでいいだろうか？

おそるおそる、シオンの顔を窺うと。

1
^
?

スゲー嬉しそうな顔に変貌する赤髪。

医者も驚いてその場にへたり込んだ。

フィリップは何事も無いようにハハハと笑っている。

シオンは情熱的な眼差しでアンリの手を握る。

「あんたならなれる！」

「ツツ」「///系妹キャラに！」

病院から悲痛な叫びが聞こえた。

60

翌日。

とりあえず退院する事になつたシオンさん。

まあ、本当の理由は病院で大声を出すのが問題なので、強制的に退院させたのだが。

それはそうとして、問題が一つある。

シオンは記憶喪失。

住所不定。

住む場所が無いのだ。

「 ちて困つたな。 どいつあるべきか……」

「 どりですね。 HIDカードも無いし……」

「 いやいや、 それなら問題あつませんよ」

「 「え？」」

フィリップの発言に、 2人は同時に疑問の声を上げた。

「 シオンくん、 これを」

「 何だ、 これは？」

フィリップが差し出した物 どいつやらカードの類だ。

シオンの写真が貼られ、 色々と記入されている。

横から見たアンリが驚きの声を上げる。

「 ！」、 これってHIDカード！？」

「 これが？どうしてあんたがこれを持つてるんだ？」

「 いやあ、 特別に発行して貰つたんですよ」

「 再発行って、 物凄く手続きが要るんじや……」

IDカードは身分証である。

紛失した場合は再発行に色々と面倒な手続きが必要だ。

「一旦やそこらで発行して貰える筈が無いのだが……。

「まあ、いいか。えーと、住所はアンダーソン食堂？一体、何処だ？」

「ちよ、叔父さん！？」

「いやあ、住所不定はアレですから。つい、ウチの住所を

ついで済む問題なのか。

アンリはため息混じりにシオンを見る。

彼は物凄い嬉しそうな顔でアンリを見ていた。

背筋が凍りそうになつた。

「つまり、あんたと同じ家に住めるんだな！これでツシマ系妹キヤラ育成に全力を注げる！！」

「いつそんな話になつたの！？」

「ん？今だが？」

「勝手に決めないでええええ！」

アンダーソン食堂。

アークシティの味処に1人の青年が住み着く事になった。

名をシオン・ディアス。

ツツコミに拘る赤髪のボケ。

彼の日常が色んな意味でスタートしようと/or/していた。

「色んな意味つて何―――! はつ、また突っ込んじゃつた!」

「いいぞ、その調子だアアアアア――!」

「うわーん! こんなわわたしのキャラじゃないのに―――つ――!」

「ハハハ、賑やかになりそうですねえ」

店長、少しは止めてやれよ(笑)。

第2話 ツツ「ミミ」を求める男（後書き）

主人公はやはりバカなところがあつてナンボだと思います。
単に僕が真面目タイプな主人公を書くのが苦手なだけですが。

第3話 アンダーソン食堂

記念祭終了から3日後、早朝。

テロリスト出現もあり、街は連日警戒が強まつたままだ。

セイバー や警備隊の数も日頃より多く見られる。

そんな街中を闊歩する2人。

ジョイとリナ アンリの友人コンビだ。

「あれから3日 アン、今いくわよ！」

「あの後、連日で街の見回りしてたつスからねえ」

セイバー である2人は、街の警備に参加していた。

特に表立った行動を起こす連中は見掛けず、退屈だった。

ちなみにアンリに会いたいと駄々をこねるリナに八つ当たりを受け
るなど、ジョイは貧乏くじを引かされっぱなしだった。

なので、今日はリナの機嫌が良くなるだらうと期待していた。

そんなこんなで、目の前にはアンダーソン食堂。

まだ開店前だが、このお嬢さんには関係ないことだ。

思いつきり、扉を開く。

「アン！会いたか

そこに居たのは、

「開店前だ。外で待つていろ」

ぶつきりぱつに掃除をする赤髪の青年

シオンだつた。

アレ？

何故、店の中にフイリップ以外の男が居るのか？

客では無い。

開店前だし、何より店の中を掃除している時点でおかしい。

「な、ななな」

「　　？何だ、騒々しい奴だな？」

「何者？～～！？不審者が店の中～～？」

「リナちゃん、この間の人つスよ～忘れたんスか！？」

胸倉を掴まれ、ぶんぶん揺すられる。

脳内震度6を記録

でも、これくらいで揺らぐシオンではなか

つた。

「不審者はお前等だ。一体、何なんだこんな早くから」

「おまよ~

そこは絶妙のタイミングで纏巻を姿のアンリがやつて来る。

「ア、アン……」

「あれ、リナちゃん?」

「す、すすす」

「す?」

「何て素晴らしき姿、あぶうううう……」

いきなり鼻血の噴水。

折角、掃除していた床が血塗れに。

「おー、アンリ。何だ、この珍獣は?俺の苦労が白無しなんだが

「えーと……」

大量に流れる鼻血。

床でビクンビクンと痙攣するリナ。

ジェイはティッシュをリナの鼻に詰め込む。

「アンの寝巻き姿……グフフ」

「リナちゃん…… 女の子がグフフハハのせじいかと懸つハスよ」

「外に捨てていいか、これ？」

「だ、ダメです！」

「 そ う か 、 な ら 仕 方 な い な チ ツ 」

「…？」

やや黒いシオンさんであつた。

鼻血で倒れたりナの復活に約1時間を要した。

余程、アンリの寝巻き姿の刺激が強かつたのか
血の量が半端ではなく、輸血に時間が掛かつた。

流れ出した鼻

「どうやって輸血したかは皆さんの」想像にお任せします（笑）。

「それで、アン。何での赤いのがいるの？」

「赤いのって……（汗）」

赤いのとはシオンの事だ。

どつやらリナはシオンが気に食わないらしい。
赤いの　　もとい、シオンは鼻血で汚れた床を丹念に拭き取つて
いる。

ジエイも手伝つてゐる。

一方のアンリはどう説明すればいいか、困り果てていた。

当の本人は同居人の事などお構い無しに掃除している。

「あ、あの人はね……」

さて、何と答えればいいのやら。

閃光の戦士　　却下。

流浪の旅人　　大却下。

もっと現実的なものを　　閃いた。

「記憶喪失の家無き子なの」

それを聞いたシオンはピタリと止まつた。

何やら震えている様だ。

作業を手伝つていたジョイも困惑する。

「あーそういうえば病院で記憶喪失つて言つてたわね。しかも家無き子?」

「うん。 色んな意味で可哀そうな人なの」

2人の会話を聞いていたシオンが隅っこでいじけ始めた。

オロオロしながら慰めの言葉を考えるが、いいアイデアが浮かばないオレンジ頭。

「でも、どうしてここにいるのよ?」

「ソロに居候する事になつたの」

「ああ、そう つてはい!?」

リナ、思考開始。

居候。

1つ屋根の下。

男。

親友に付く悪い虫。

色々あつて押し倒される親友。

親友の貞操の危機。

思考終了。

……何やら話が飛躍し過ぎだが、彼女はそう結論した。

そして次に出た行動は 。

「死ねええええええええ！」

「えええええ！」

黒ボニー、飛翔。

赤髪の抹殺に乗り出したのだ。

隅っこでいじけるシオンに向かつて飛び掛った。

「（ 殺氣！？ ）」

いじけてたシオンも殺氣を感じ取り、振り返る。

飛び掛つてくる黒髪ボニー テール 黒ボニーを認識した。

次の瞬間、彼は驚くべき行動に出た。

普通なら避けるものだが

「え？」

間の抜けた声を出すオレンジ頭。

赤髪の取つた行動
それは非情なものだった。

自分に対して慰めの言葉を考えてくれていたオレンジ頭を盾にする
という行為だった。

野生の獣と化したリナには何も聞こえなかつた。

超高速で繰り出される拳打

滅多打ちにされるオレンジ頭。

「ふう、危なかつた」

「危なかつたじやなーい！」

アンリの右ストレート！

ショーンの顔面にヒット！

アンリはレベルが上がった！

ツツ「ミミが4上がった！

健氣さが6下がつた！

「何コレ…？」してレベルが上がつてゐるの…？

「くつくつくつ……健氣さが下がつてゐなあ、アンリ」

「はつ…し、シオンさん…まさか…？」

「やつ その通り！俺がオレンジ頭を盾にしたのは黒ボニーから身を守る為ではないッ…！お前にツツ「ミミを入れさせる為だ！」

ガガーンという効果音が何処からか聞こえてきた。

本当にどつから聞こえてくんだよ（笑）。

つまり、アンリはシオンの策略に嵌められたのだ。

策略つてほどでもないが。

「これでまた1歩、ツツ「ミミ系妹キャラに近付いたといつワケだ、フハハハハハハ！」

「…………や…………わたしのキャラを変えないでええええええ！」

悪役の様な高笑いをするシオンさん。

がつくりと頃垂れるアンリ。

だが シオンは気付いていなかつた。

オレンジ頭が撃沈し、リナはそれを識別している事を。

「キシャアアアアア、これは赤いのじゃない。赤いのじゃない」

どうやら「りりりやくフルボッコ」にしてたのがシオンじゃないと気付いたらしい。

オレンジ頭は半死半生。

魂が抜け掛かつていた。

リナ、索敵モード。

視界に高笑いしている赤髪を発見。

傍で頃垂れているアンリを確認。

「おのれ、アンを泣かせたなアアアアーー！」

「ハハオー？」

リナの鉄拳がめり込んだ。

どうやら完全に油断してたっぽいシオンちゃん。

そのまま床に倒れる。

「 親友を泣かせるたあ、フテー野郎だーお仕置きじやあああああ
あー！」

「 ぬあああああああああーーー！」

マウントポジション + 滅多打ち。

血の海と化す食堂。

髪のみならず、全身が赤くなるシオングさん。

現在、再生中のオレンジ頭。

「（叔父さん、早く帰つて来てええええ）」

この場に居ないフィリップに助けを求めるアンリ。

地獄絵図のアンダーソン食堂。

アンリの店主は何処に行つたのだろうか？

某所。

真つ暗な場所をフイリップは歩いていた。

厨房に立つ時のコック姿ではなく、割とラフな服装だ。

普段の二コ二コ顔ではない。

氷の様な冷たさを感じさせる田付き。

今、彼は料理人ではない。

例えるなら狩人。

獲物を狩るハンターとでも言えればいいだらうか。

やがて、歩くのを止める。

「久しぶりですね、かれこれ10年ぶりでしょうか?」

「ああ、お前が『引退』して以来だな」

暗闇から幽鬼の様に1人の男が現れる。

年齢はフイリップと変わらないくらい

40代かそこらだらう。

強面の顔と、顔の至るところにある傷。

子供が見たら確實に泣き出しそうな大男だ。

「お前が」に来るとは 何かあつたのか？」

「ええ、少し気になる事がありましてね。……」の青年の事を調べて欲しいんですよ」

フィリップが懐から写真を取り出す。

受け取る大男。

写真に写っているのは赤髪の男。

記憶喪失の居候の姿だった。

アンダーソン食堂に転がる死体が2つ。

いや、死んでませんけどね。

顔面がボコボコになつた赤髪とオレンジ頭。

少し離れた席にアンリとリナは座っていた。

リナはティーカップに入ったお茶を啜る。

「ん～～～いい味。アンが淹れてくれたお茶は格別ね」

「リナちゃん、現実から目を背けないで」

「……はい、ごめんなさい。やり過ぎました」

その後、アンリが止めに入つた事もあり、シオンは何とか九死に一生を得た。

と、起き上がる赤髪。

顔を擦つて いるあたり、やはり痛いのだろう。

まあ、顔面ボツコボコだから仕方ないのだろうが。

「やれやれ、えらい目に遭つたな。おい、オレンジ頭。お前の方は大丈夫か？」

「大丈夫なワケないじゃな伊斯カ。人を盾にしておいてよくもぬけぬけと……」

「……オイ、ちょっと待て」

「何スか？」

「お前、顔が……」

シオンは信じられない物を見るかの様な顔だ。

無理も無い。

「ボコボコだつたオレンジ頭の顔が綺麗さつぱり元通りになつているからだ。

「毎日リナちゃんに殴られてるつスからね。打たれ強さと再生能力なら誰にも負けないつスよ」

「打たれ強さはともかく、再生能力はどうかと思つが……」

田の前に居るオレンジ頭が人間かどうか疑わしい田で見る。

と、そんなどうでもいい事を考えてると……。

「！」たちわ～

店の扉が開き、新たな来訪者が現れた。

第3話 アンダーソン食堂（後書き）

ジョイとリナは書いて楽しいです。

そして、アホなシオンさんと被害者アンリも書いて楽しいです。

次回、新キャラ登場！

第4話 雑貨屋ザ・シユ

黒ポニーの大暴走。

まあ、アンリの説得で何とか收まり、めでたしめでたし。

そんな感じにやつて来た来訪者。

やや長い金髪を赤い髪紐で結んだ青年。

年齢はシオンと同年代くらいに見える。

右脇に何か小包を抱えている。

人から見れば、軽薄そうな感じの男に見えるかもしれない。

だが、彼を見た瞬間、シオンの顔付きが変わった。

「（）いつ、俺と同じ匂いが（）」

自分と同じ匂い。

そう、血の匂いがした。

瞬時に理解する。

この男が自分と同類だと。

人殺しである。

警戒心を強めて男を見る。

男は小包を持ってアンリのところまで来る。

「あ、ザッシュュさん」

「頼まれてた調味料持つて来たよ。フイリップさん居ないの？」

「出掛けてるみたい。何処に行つたんだ？」

「そつか。あ、前に言つたんだけどさあ、僕の事は名前じゃなくて、『お兄ちゃん』で……んが！？」

男 ザッシュュは最後まで言い終える事が出来なかつた。

彼の言葉を遮つたもの。

黒いポニーテールの鬼であつた。

彼女は物凄い笑顔で、ドス黒いオーラを纏つていた。

ザッシュュは彼女にアイアンクローフをかまされたのだ。

ちなみにリナ（大体、154cmくらい）、ザッシュュ（180cmくらい）である。

ちつこいこの身体の何処に男1人を軽々と持ち上げるパワーがあるのだろうか？

「ねえ、ザッショウあん 今、あたしの親友に何しようとしたの？」

「いや、『お兄ちゃん』と呼んで貰いたいな～って」

「この口つ口ンガアアアアア！いい加減に懲りろオオオオオオオ！」

「いやだいー僕はアンコちゃんにお兄ちゃんと呼ばれるまで諦めない！」

「キシャアアアアアアアア！」

「んがああああああああああ！」

アイアンクローで極められながらも抵抗する金髪。

ミンミンとこ^トう嫌な音が店内に響く。

そんな2人のやり取りを慌てて止めようとするアンリ。

シオンは最初に彼を見た時の抱いた警戒心が吹っ飛んだ。

白けた目で目の前の光景を見ながら、隣のオレンジ頭に尋ねる。

「おい、オレンジ頭。あいつは何なんだ？」

「え？ 兄貴の事つスか？」

「兄貴？ あの金髪はお前の兄なのか？」

「違うつスよ。兄貴つてのは敬称みたいなもんスよ。兄弟じゃないつス」

「そうか。で、あいつは何者なんだ？」

「あの人はこの近くで雑貨屋をやつてるザッシュさんつス。フイリップさんとは昔からの知り合いで、よく調味料を届けに来てくれるみたいつス」

「奴は何故、アンリに兄と呼ぶ様に迫つているんだ？」

「それがあの人生き甲斐の1つだからつス。妹系を見れば、お兄ちゃんと呼んで欲しくて、女王様系を見れば、奴隸にしてくれって叫んでたつスからねえ」

「なるほど、ある意味で危険人物という事は理解した」

「尤もな意見です（笑）。

重い腰を上げ、シオンは騒動の中心に向かう。

ジエイを止めようとしたが、振り返りもしない。

「おい、お前等」

「「「へ？」」」

3人は一斉にシオンに視線を向ける。

そこには腕を組んだシオンさんの姿があつた。

いきなり乱入してきたこの赤髪。

何が目的なのか。

「不毛な争いはやめる。店内が荒れるだらつ」

えらいマトモな意見をしてきた。

このままの状態が続けば、店が荒れるのは時間の問題だ。

アンリは田元にハンカチを当てた。

病院でのこの赤髪の行動には泣かされたが、今は頼もしく

「雑貨屋、貴様の言動は許せん。アンリをツツコミ系妹キャラに開発し、兄と呼んで貰うのはこの俺だー！」

アンリの飛び蹴り！

シボンの顔面にケラーンヒッシュエニ

アンリはレベルが上がった！

シシナミが11上がった！

キャラ崩壊が始まつた！

シオンはいい笑顔で微笑んでいる！

「ああああああああ！ またしてもオオオオオオオオ！ ？」

頃垂れるアンリ

そこには

「何がしたいのよ、アンタはアアアアア！」

黒ボ一からも飛び蹴りをかまされた。

鼻から滝の様な鼻血が噴出し、そのまま倒れるシボンちゃん。

サシニは頭を搔きながら「アソリ達は説明を求める

「えーと……誰、この人？」

「シオン・ディアスさん。記念祭の最終日にテロが遭つたでしょ？ その時に助けて貰つたんだけど」

「しかも図々しい事で、元の居候になつてんのよ」

「何ですとオオオオオオ！？つまり、毎日の様にアンリちゃんにあんな事やそんな事を！？」

不謹慎な発言をする雑貨屋にバックドロップをかます黒ボーイ。

床に大きな穴が開いた。

アンダーソン食堂に人間が1匹生えた。

アンリは頭が痛くなってきた。

叔父にどんな言い訳をすればいいのだ。

こんな惨状を見られたら生だまつたもんじやない

といふえで少しでも片付けておこう

と
思
う
た
矢
先

たたしま帰らましたよ！」

最悪のタイミングで帰還する店長

顔は笑顔のまま

動きが止まる

店の中が大惨事。

床から生えている雑貨屋。

鼻血噴いて倒れてる赤髪。

「皆さん、ひょっとお話しましょうか」

「お、叔父さ……」

「いい訳はいりません。皆さあ、床に座ってください」

「この後、どうなったかは当事者達にしか分からぬ」

ただ、全員がげつそりとしていた。

よほど、じつと絞られたのか。

それとも別の何かがあつたのか……。

しかも、全員に罰が下された。

アンリ、リナ、ジョイは店の手伝い（閉店までフルで）。

シオン、ザックは出前を届けに行かなければならなくなつた。

時間は流れ、午後10時。

アンダーソン食堂は死屍累々。

正確には魂を燃やしきくしたアンリ、リナ、ジェイが床に転がっていた。

「もう動きない……」

「ひ～ん……」

「お、終わったつ……ス

対照的に、赤髪と雑貨屋はカウンター席に座っていた。

「いやあ、助かりましたよ～」

「疲れた、慣れん事をしたな……」

「僕は楽しかったよ 可愛いお嬢さんや～い色気あるスマーダムとお嬢出でよかつたよ」

はふーんと鼻息を鳴らす雑貨屋。

出前先のお嬢さんやら奥様と会話出来て、満悦の様子。

店長はお茶を入れて、カウンターに出す。

シオンはジト目でザッショウを見る。

「（）いつからは確かに血の匂いがした……。一体、何者なんだ…
…～）」

出前の時も、常にザッショウの行動に目を配っていた。

何か不審な行為をしないか、と。

特にそんな素振りは無かったのだが、疑念はまだ晴れない。

シオンの気持ちを知つてか知らずか、話し掛けてくる雑貨屋。

「今日はお疲れ。まあ、一緒にティータイムといつよ」

「……ああ」

気にはなるが、とりあえず疲れたのでお茶を啜る。

苦い。

しかし、彼にはこの苦さがクセになりそうだった。

「店長、これは何でお茶だ？いい味だ」

「お？シオンくんも緑茶派みたいだね」

「フフフ、緑茶同盟に1名追加ですねえ」

「店長、その名簿は何だ？緑茶同盟って何だ…？」

何か店長がややイッてる田で何かの名簿を書き込んでいる。

その姿に不安を憶え、呼び掛けるが反応が無い。

果たして縁茶同盟とは何なのか。

まあ、どうせ名前だけの登場だけだろうが（笑）。

そんな2人を尻目にザツシユが席から立つ。

「さて、僕はそろそろ帰るかな。まだ『仕事』が残ってるし」

「（……『仕事』だと？）」

時刻は夜の10時過ぎだ。

こんな時間に何の仕事をするのだ？

ザツシユはヒラヒラと手を振りながら食堂を後にした。

夜は更に深まり……深夜0時を過ぎた。

アークシティ西区、倉庫区域 別名『倉庫街』。

幾多の倉庫が並び、まるで街の様に見える様からこの名が付けられた。

ここではアークシティの品物は勿論、他の街の品物も多数保管されている。

しかし、ここに置いてあるのが正規の品だけとは限らない。

いつの時代でもいるのだ。

密輸に走る者が。

倉庫街の中でもとりわけ外れに位置する倉庫で、今正に密輸品の取引が行われていた。

人数は8人。

体格からして、全員が男。

顔を覆面で隠しているので年齢は分からぬ。

「ほつ、これが例の……」

男の1人が密輸品を手に取る。

銃器などの武器ではない。

紫色の液体が入ったアンプル。

薬品の一種だろうか？

見るからに不気味な紫色の液体は何か危険なものを感じさせる。

明らかに非合法薬物であるのは明確だ。

「ああ、新たに開発された新薬だ。これを使えば……」

「簡単に強い戦力が手に入るという事か」

「では、の方々に渡しに行こう」

男達の口が歪む。

この薬物を用いて、何かよからぬ事を企んでいるのは明白だ。

1人が薬物をトランクケースに詰める。

早速行動に移るべく、動き出す男達。

だが それは出来なかつた。

ヒュンという、風を切る様な音が聞こえた。

何の音だ？

男達が周囲の様子を窺う。

が、次の瞬間。

8人の内、前方を歩いていた6人の首が消えた。

首が消えた身体から、血飛沫が舞う。

地に沈んでいく6つの肉塊。

同時、何かが上から落ちてきた。

6人の首だ。

その表情は何ら変化も無い。

殺された事にすら気付かずに逝った様だ。

残つた2人は背後を取られない様に、背中合わせの格好になる。

全身から汗が噴出す。

何か、恐ろしい何かがここに居る。

ほんの僅かな時間で6人の首を切る何かが

。

「君達、それを渡してくれないかな?」

暗闇の中から男の声が聞こえてくる。

2人の身体が硬直した。

暗闇から聞こえてくる声の主。

姿が見えないが、背筋が凍り付きそうな殺氣を放っている。

例の薬物が入ったトランクケース。

これを渡せば、命は助かるのだろうか。

否、そんな保証はない。

警告も無しにいきなり6人を殺した相手だ。

渡せば、自分達もあの世逝きに違いない。

かといって、たとえ命を助けられたとして、自分達に明日は無い。

この薬物が届くのを持つ者達が居る。

連中は自分達よりも上の立場の存在だ。

もし、これを渡した事が露見すれば、自分達は間違いなく殺される
だろう。

どちらも選べない。

なら、残る選択肢は一つ。

2人は懐から何かを取り出した。

紫色の液体が入ったアンプル。

例の薬物だ。

「何をする気だい？」

声の主の問いに、2人は答えなかつた。

彼らはアンプルを開け、薬物を飲み干した。

液体が無くなつたアンプルが地面に落ちる。

その場に蹲る2人。

身体をぶるぶると震わせている。

そして、変化が起きる。

2人の筋肉がありえないほど隆起する。

着ていた上着が千切れた。

顔付きもまるで食べた獣の様な凶悪なものに変貌する。

悪鬼ともいえばいいのだろうか。

2人は、今にも獲物を食い殺す悪鬼へと化した。

「やれやれ……。連中もトンデモない代物を作つたねえ」

暗闇からその男は姿を現した。

左手に剣が握られている。

黒い刀身といつ、まるで夜を思わせる特徴的な長剣。

ピチャリピチャリと、何かが剣から滴る。

真っ赤な液体 血。

先ほど死んだ6人は、この剣で首を跳ね飛ばされた様だ。

「「GAAAAAAA!-!」」

叫ぶ2人。

もはや完全に獣。

理性の欠片も見られない。

「哀れだねえ。大人しく渡せば命は助けたのにさあ。ま、渡したら渡したで君ら殺されてただろうじ。どっちでも同じかな」

男は冷めた目で剣を構える。

こうなった以上、この2人が元に戻る可能性は低い。

どの道死ぬのなら。

「楽にしてあげるよ」

今、ここで息の根を止める。

男の剣に白い光 意力が収束されていく。

真白い光の意力と、黒い刀身の剣。

相反する色が同居する。

「『黒雷』、参る」

男が地を蹴った。

2人も同時にだ。

獣の様な咆哮が、倉庫街に響いた。

アンダーソン食堂2階、シオンの部屋。

元々空き部屋だったが、シオンがここに住む事になったので部屋として使う事になった。

とはいっても、まだ家具らしい物はあまりない。

あるいはベッドとタンスくらいか。

時間が時間なので、流石のシオンも寝ていた。

だが、不意に瞳を開ける。

身体を起こし、周囲を見回す。

「何だ……？ 何かを感じる……意力か？」

ここから少し離れた場所から、意力がぶつかり合つを感じ取った。

外で何かが起きている。

「何が起きてるかは知らんが、ここまで被害が及んだらアンリや店長が危険かもしれない」

まだ会つて数日だが、ここに住まわせて貰つてこのには感謝している。

ベッドから出ると窓を開け、タンスを開いて服装を整える。

着替え終わると窓を開け、跳躍。

そのまま地面まで一気に着地する。

「ここから少し西か……」

鋭い眼光で、何かが待つ西を見つめる。

漆黒の暗闇。

その中を、赤い風が駆け抜けた。

目指す場所は、西区倉庫街。

第4話 雑貨屋ザッシュュ（後書き）

何かどんどん二枚目が増えてる様な気がします（笑）。
5話目以降は暫く時間が掛かりそうです。

登場人物

シオン・ディアス

年齢：推定23～25歳、186cm。

この物語の主人公かもしれない人。

閃光と共に出現した記憶喪失の青年。

名前と戦い方、意力の使い方以外は何も憶えていない。
一見するとクールに見えるが、意外とノリは良い方。

特にツツ「ミが絡むと無駄にテンションが高くなる。

アンリをツツ「ミ系妹キャラにすべく、色々な策略を企てている（笑）。

アンリ・アンダーソン

16歳、160cm。

叔父が経営するアンダーソン食堂に住む少女。

普段は調理学校に通う生徒で、授業が早く終わった日や休日は食堂の手伝いをしている。

ジェイ、リナとは幼馴染。

シオンの策で徐々にツツ「ミ系妹キャラになりつつある。

本人としては健気な妹キャラがいいらしい。

ジョイ・リアリスト

16歳、170cm。

アンリ、リナとは幼馴染。

オレンジの髪をバンダナで逆立たせている。

通称、オレンジ頭。

余計な事をしてはリナに殴られる毎日。

その為か、異様に打たれ強い上に再生能力も高い（笑）。

リナ・アイランス

16歳、154cm。

アンリ、ジョイとは幼馴染。

黒髪をポニーテールにしている。

通称、黒ポニー。

やや百合の気があり、アンリへのスキンシップが過剰。
逆にジョイの扱いはぞんざい。

フィリップ・アンダーソン

40代、175cm。

アンリの叔父。

アンダーソン食堂の店長。

食堂をほぼ一人で切り盛りする恐るべき男。

いつも二口二口顔だが、怒らせると怖いらしく（顔は笑つたままな

何かと謎の多い人物。
ので怖さ倍増)。

第5話 夜の出来事

激しい金属音が倉庫街に響く。

今、倉庫街の外れで対峙する三者。

1人は黒い剣を持つ男。

残る2人は筋肉が異様に隆起した異形の男達。

黒い剣を持った男が、1人に斬り掛かった。

普通ならば、相手が切り裂かれて血が噴出するのがイメージ出来るだろ、う。

相手が『普通』ならばの話だ。

剣は相手を傷付けた。

傷付けはしたが、出血量は微々たるもの。

よくある薄皮を少し切つて、血が滲み出た程度にしか見えない。

「おいおい、いくらなんでも硬過ぎでしょうがこの筋肉マッチョさん つと！」

軽口を叩きながら、後方に跳躍する。

もう一人が男に目掛けて、拳を繰り出してきたからだ。

回避は成功し、男が元々居た場所に拳が叩き付けられる。

轟音が響き、地面に大穴が開いた。

「あつぶなー！馬鹿力もいいところだよ……つおー？」

間髪入れず、2人同時に突進してくる。

でかい団体の割りに凄まじい速度だ。

男は慌てずに左手を正面に広げる。

何故、避けようとしないのか？

答えは直ぐに出た。

けたたましい音と共に、異形の2人が何かに激突した。

男と異形達の間に光の壁が発生している。

光の壁は、異形達の侵入を許さない。

まるで、黒い剣の男を守る壁の様に。

しかしながら、壁には少々の鱗割れが見られる。

「即席で作った障壁とはいえ、鱗が入るとはまいったねこりやつー？」

男の顔が急に強張った。

剣を構える。

彼の目に、異形達など映つていなかつた。

「（来る……強い意力を持つた誰かが、この二人よりも遙かに危険なものが）」

この場所に近付く、恐ろしい何かに警戒心が高まる。

耳を澄ます。

足音が聞こえる。

何かが一ひきに走つてきているのが分かる。

「（……誰だ？誰）」

そう思つたと同時だつた。

異形達を阻んでいた光の壁が破壊されたのは。

轟音が鳴り響いた。

倉庫街。

多くの倉庫が並ぶ事からそう呼ばれるこの場所。

今、そこを駆け抜ける男が1人。

真っ赤な髪は炎、身に纏つ白いロングコートは雪を連想させた。

男 名をシオン・ディアス。

アンダーソン食堂に住んで3日目の記憶喪失の居候。

外で何かの騒ぎを感じた彼は、その場所へと向かっていた。

遠くで轟音が響くのが聞こえた。

走る速度を更に速める。

常人ではまるで追いつけそうに無い俊足。

同時に、シオンは自分の特異性に改めて気付かされた。

ここから食堂までそれなりの距離がある。

それなのに、自分は呼吸を殆ど乱していなかった。

やはり、そうなのか。

心の中で納得した。

自分は単なる一般人では無いのだと。

手に染み付いた血の匂い。

何故か憶えている意力の扱い。

身体能力。

自分は、戦士なのだと理解した。

血で血を洗う様な場所を生きていたのではないかと。

ここを訪れたのは、アンリ達に無用な被害が及ぶかも知れないと考
えての事。

だが、本心はそうだろうか？

戦いを、血を求めているのではないだろうか？

「（今、考える暇は無いな）」

今はただ走るのみ。

そして、自分の出来る事をやるだけだ。

即ち、戦うのみ。

辿り着いた場所。

そこは爆発でもあったのか。

砂煙が舞い、周囲には砕け散った建造物やらの破片が散らばっている。

周囲に気を配る。

居る。

砂煙の中に、何かが居る。

数は2つ。

やたらと大きな影が見える。

砂煙が晴れる。

現れたのは 筋肉が異様に隆起した異形の2人。

「（何だ？人間なのか、こいつら……？）」

目の前の異形に、流石に疑問を感じるシオン。

だが、考える暇など無い。

異形達はシオンを見るなり走り出した。

来る。

相手は得体の知れない2人だ。

まずは相手の力量を把握すべきだ。

拳を振るう異形達。

シオンは避けもせず 2人の拳を難なく“受け止めた”。

足元がやや地面にめり込んだ。

だが、その表情には一切の焦りや苦痛は見られない。

「お前達、何者だ？」何をしていた？

一応、声を掛ける。

話が通じる相手ならば、色々と質問しようと考えたのだ。

が、そんな考へは直ぐに吹っ飛んだ。

「「GAAAAAAA!-!-」」

奇声を上げながら、拳を捻りこんで来る異形達。

重量感が増していく。

無駄な行為だったか と、心の中で毒づく。

こいつらには知性の欠片も見られない。

話し合いなど必要ない。

速攻で片付けるのみ

એવી કોઈ કાર્યાલયની વિશે આપણે આપણે આપણે આપણે

彼女の筆に力が声を上げ
シンの両手は意力が集結される

異形達の拳から車を音が鳴る

そして

卷之三

異形達が思いやうに上空は飛行飛はされが

途轍もない重量を認めるであらうが、凄まじい速度で上昇していく。

常人から見れば信じられない光景であろう。

ただでさえ、地面に大穴を空ける様な異形達の拳を受け止め、尚且つそのまま投げ飛ばしたのだから。

投げ飛ばされた異形達は一向に落下する傾向が見られない。

どれだけの高さまで飛ぶのだろうか。

「「AAAAAAA！！」」

思いがけぬ事態に、奇声を上げる異形達。

だが、事態はそれだけでは収まらない。

自分達の“上空”に、シオンが突如出現したのだ。

投げ飛ばした時点でまだ地上に居た筈なのに、だ。

「落ちる」

異形達の顔面に、蹴りが叩き込まれる。

シオンが蹴りを入れたまま、落下が始まった。

上昇する時以上の速度で地上まで一気に加速

そして、激突。

爆音の様な轟音と共に、地面が抉れた。

砂煙が舞う。

周囲はまるで爆撃された跡の様だ。

やがて、砂煙が晴れた。

そこには、動かなくなつた異形が2体。

服に付着した砂利を払うシオンの姿があつた。

「……そして、どうしたものか」

少々、やり過ぎてしまつた。

これだけの事をしでかしたのだから、人が集まるのも時間の問題だ
るつ。

まして、自分は記憶喪失。

なのにこんな化け物を倒すのだから、色々と面倒な事になりそうだ。

アンリやフィリップに迷惑を掛けるのは頂けない。

「逃げるか」

それしかない。

この場から立ち去りうつと、走り　　出さなかつた。

田を鋭くさせ、遙か後方にある倉庫の方を睨んだ。

こんな真夜中だ、何も見える筈は無いのだが……。

「……警戒している様だが、敵意は無いな。なら、行かせて貰おう」

誰に向けて言つた台詞なのか。

背を向け、一気に走り去つた。

残つたのは動かなくなつた異形のみ。

「ふう……行つたか。気付かれてたよね、完璧」

暗闇の向こうから、1人の男が現れる。

左手には黒い剣が握られている。

最初にこの異形達と戦つていた男だ。

「どうやら無事だつた様子だが……。

「トンデモないねえ。僕だつたらこいつらの拳を受け止めるなんて
デンジャラスな真似は出来ないっての」

男はそう言いながら、異形達の前までやつて來た。

まだ息はある。

それを確認すると、剣を1体の喉元に向けた。

一気に下ろす。

血飛沫が舞つた。

溢れる鮮血で、地面が血の海に変わる。

異形は痙攣し、それに呼応する様に隆起した筋肉が萎んでいく。

やがて、そこには異形の姿は無く1人の男の死体だけが残つた。

もつて一休に田を向ける。

「わがには剣を向けない。

男は懐から通信機らしきものを取り出す。

「ひづら『黒雷』。直ぐに来て欲しいんだナゾ。うん、“回収”に
ね」

翌朝。

食堂ではいつももの様に、フイリップが仕込みに励む姿がある。

カウンターにはシオンが居た。

食堂の片隅にあるテレビを眺めていた。

番組はニュース。

気になつたのだ、真夜中の出来事が取り上げられたのかを。

『えー、今日未明西区倉庫街で爆発事故が起きた模様』

ニュースから聞こえてきた内容に耳を疑う。

爆発事故……？

次々と流れてくる内容。

一向にあの異形に関する情報は流れてこない。

どういう事だらうか。

何者かが、裏で情報操作しているのか？

しかし、誰が？

メディアを動かすなど、余程の大物でもなければ無理だらう。

「（どうにしど、記憶喪失の俺では関わる事すら出来んだらうな
……）」

溜息を吐き、カウンターから絆つ。

「おや、何処に行くんですか？」

「少し、散歩してくる。ひょとしたら俺の知り合いと遭遇するかもしれん」

「そうですか。お皿までには帰つてきて下さいよ

「ああ、分かつてゐる ん？」

ふと、窓の外に見慣れた姿があった。

オレンジ頭と黒ボーイのコンビ ジェイとリナだ。

こんな朝早くから何をしているのだろうか？

「アン早く起きないかな～」

「……………そりゃスね」

「「」の間みたいな寝巻き姿でああ」

「……………そりゃスね」

「グヒ～ヘッヘッヘッ、それだけでご飯3杯いけるわあ～」

「リナちゃん、その笑い声はどいつかと思ひますよ……」

とても女の子笑い声とは思えない声を出すリナ。

ハンカチを田元に当てるジョン。

2人が窓の外から店の様子を窺っていた。

やはり目的はアンリの黒ボーイ。

オレンジ頭は随伴といつたことじるか。

店の外に出て、2人の元に行く。

「何をしとるんだ、お前らは？」

「あ、赤いの！」

「どもつス、赤髪の旦那」

「名前で呼んで欲しいもんだが……。で、何をしてたんだ？」

「見て分かんないの？アンの可憐な姿を見てたのよ」

「オレは無理やり連れて来られたつス」

「ああ、そうか」

この黒ボニーの頭の中はアンの事でいっぱいいらっしゃった。

右手に百合の花持つてるし（笑）。

付き合わされるオレンジ頭もいい迷惑だらう。

「あ、そーそー赤いの」

「何だ？」

「アンタ、仕事しねの？」

「店の掃除」

「「んなモン仕事とは言わんわあー手伝いレベルッ！ー」」

ですよねー（笑）。

グゥの音も出ないシオンさん。

世話になつてゐる以上、生活費は出さなきやね。

「しかし、仕事と言つてもな。俺に合つ仕事なんて……」

「実は旦那に合つそな仕事があるんスよ」

「俺に合つ仕事？」

「とつあえず付いて来て。まあ、するかしないかはアンタに任せ
から」

2人に連れられ、歩くシオン。

彼に合つ仕事とは
？

第5話 夜の出来事（後書き）

戦闘描写が表現し難い……。

やっぱり、戦闘系の話を書いてる人には全然敵わないと思います。

次回はもう少し掛かります。

第6話 セイバー

アークシティ南区。

街の治安維持組織の本拠地である。

シオンはリナとジョイに連れられ、ここに足を運んでいた。

自分に合つ仕事をやらないかと言わされて来たのだが……。

「着いたわよ」

田の前には何やらテカイ建物。

敷地面積はかなりある。

気になつて、周囲に目を配る。

金網が張つてある一帯が田に移り、その先にはリングの様な場所が見えた。

闘技場

「何は？」

「セイバー・ギルド・アークシティ本部つスよ

「セイバーって何だ？」

「第1話にちよつとした説明があるから見て」

「そりゃ、第1話に書いてあるのか」

「（第1話つて何スか……？）」

メタ発言する2人。

ついていけないオレンジ頭。

そんなオレンジ頭を無視し、中に入る2人。ひでえ

慌てて追いかけるオレンジ頭。

入った先はそこそこ広い部屋。

正面に受付があり、受付嬢らしき女性の姿が見える。

スーツとメガネが似合つ知的そつな女性。

年齢はシオンと変わらないくらいか。

「あら、リナちゃんとジョイくん。依頼受けに来たの？」

「こたちは、ランさん。実はセイバーに入れたい人連れて来たんだけど」

「そちらの方？初めてまして、受付のランです」

「シオン・ディアスだ。よろしく頼む」

軽く挨拶を交わす2人。

彼女に案内され、ある一室の前に来る。

「じつやじゅうじの代表が仕事している部屋らしい。」

はたして、どんな人物がここにトップなのだろうか。

ランが扉をノックする。

「ルカさん、失礼します」

「おひ、入ってきな」

扉が開き、中に入
れなかつた。

扉を開けた途端、紙の山が押し寄せてきたのだ。

咄嗟にランの前に出て、紙の氾濫を食い止めた。

しかし、途轍もない量だ。

何百枚じゅうじの騒ぎではない。

一枚、手に取つて見てみる。

何やひ、報告書の類らしい。

ランはシオンに頭を下げ、部屋に入る。

「ルカさんー報告書を溜めないでと前にも書いたでしょうー?」

「いやー悪い悪い。まさか、こんなに溜まるとは思わなかつたから
わあ」

ルカと呼ばれた人物はガハハと笑いながら、頭を搔く。

あまり反省している様には見えない。

名前から察していたが、女性だつた様だ。

年齢は30代くらうだらうか。

シオンには及ばないが、かなりの長身だ。

「おーい、これはどうすればいいんだ?」

「ん?誰だい、あんたは?」

「セイバーになりに来た者なんだが……」

「ああ、あんたがジェイ達の言つてた奴か。あたしはルカ・バルド
ー。」のボスさ」

「シオン・ティアスだ、よろしく頼む……で、これはどうすればいい
んだ?」

シオンは押し止めている報告書の処遇を尋ねる。

「のままでは身動き出来ないからだ。」

「ああ、ゴミ箱に」

「ルカさん？」

「……この部屋の床に頬むよ」

「ああ、分かった」

ランのどす黒いオーラに当てられ、冷や汗を流すルカ。

シオンは学習した。

彼女 ランは怒らせではならない人間だと。

30分後。

シオンはルカ、ランにある場所まで案内される。

場所は外。

先ほど見えた金網地帯 つまり、闘技場リングらしき場所に立つていいのだ。

近くで見ると、リングにはところどころ鱗割れが見られる。

それに随分と古めかしい雰囲気を感じた。

ここ数年内に作られた物ではない。

「大昔の物を再利用してると云つたところか……」

「おや、なかなか目が利くねえ。そうさ、このリングは國家が存在した頃に使用された物さ。最低でも100年以上は前のモンかねえ」

「なるほど……。で、何をすればいいんだ？まあ、場所が場所だけにさしつけ実技試験といったところか」

「察しがいいねえ。本来ならまず意力の基礎技術を叩き込んで行つもんだけど、あんたはどうやら必要ないみたいだからね。この2人と戦つて貰うよ」

この2人 それはシオンをここに連れてきた張本人達。

「ういーっス」

「腕が鳴るわね」

「やはりお前らか」

対戦相手はジェイとリナ。

2人はそれぞれ得物を持っていた。

ジェイは身の丈ほどある大きな剣。

リナはダガーによる一刀流。

得物から2人の戦闘スタイルを分析する。

ジェイの大剣は見る限り、相当な重量があるだろ？。

いつも黒ボニーに殴られる印象から想像も出来ないが、見た目によらず臂力があるパワーファイターの様だ。

一方のリナの方はスピードタイプといったところか。

装備が軽いダガー、身に着けている服も動きやすそうな軽装だ。

「こいつちは準備万端よ。あんたも何か武器を」

「いらん。俺は素手でいい」

「そーいや、こないだのテロリスト共も素手で倒してたつスね」

「（ほう……）」

シオンの戦闘スタイルに関心を持つルカ。

現代に於いて、素手で犯罪者と戦う者は皆無に等しい。

100年前の大戦時代には、意力を用いた体術が多数存在していたという。

しかし、大戦の教訓で意力の習得に関する法案が決定した事から、古流の体術は次第に廃れていった。

今残っているのは護身術の系統くらいなものだろうか。

ゆえに興味がある。

喧嘩流か、はたまた護身系統の体術使いなのか。

武器を構える2人。

応える様に、拳を構えるシオン。

ずん、と空気が重くなつた。

ルカに変化は見られないが、ラン、ジェイ、リナの3人は頬に汗が伝つていた。

空気を重くしたのは目の前の赤髪の男だ。

「どうした？ 来ないのか？」

「うっさい。行くわよ、ジェイ！」

「うっス！」

2人は左右に別れる。

シオンは出方を待つ。

自ら仕掛ける事も考えたが、まずは相手の実力を見極めた上で行動を取る事にした。

最初に仕掛けて来たのはジエイだ。

重量感ある大剣を構えて突撃してきた。

見た目によらず、足は速い。

自慢の大剣からは意力が発せられ、シオン目掛けて渾身の一撃が繰り出される。

迫る大剣

普通なら避けるだろう。

だが、シオンは避けない。

否、避けるどころか右手をかざした。

「なつ！？」

ジェイは驚愕する。

赤髪が掌で自分の大剣を受け止めたのだ。

何故斬れないのか。

理由は簡単だ。

シオンの掌にも意力が込められ、ジェイの大剣の一撃を防いだのだ。

「意力の一点集中　　早い。 いえ、早過ぎる！」

観戦していたランが声を荒げる。

意力の一点集中。

それは意力の基礎の1つ。

肉体の一部に意力を集約させ、その部分を強化する。

強化する部分は込める意力の強さによって異なり、込める量が多いほど強度は増す。

しかし、込める意力が多いほど時間が掛かるのだ。

赤髪はそれを大剣が直撃する“瞬間”にやつてのけたのだ。

早いどころではない、異常とも取れるレベルだ。

込めた意力が少なければ、当然手は切断される。

切断されないという事は、ジエイの大剣に込めた意力よりもシオンが掌に込めた意力の方が強いという事だ。

押し切れない！

大剣に更に力を込めるも、赤髪は微動だにしない。

だが、膠着状態は何時までも続かない。

「背中がガラ空きよ！」

後方からリナが斬り掛かつて来た。

得物は10cmほどのダガー

ジエイの大剣に比べると一撃の威力とり一チは劣る。

その分、軽くて攻撃速度は速い。

しかし、それ以上に脅威なのは、彼女から発せられる殺氣だ。

尋常ではない。

試験ではなく、本気で命を取りに来たハンターとでも評すればいいだろうか。

「（コナちゃんあああああん、殺すのは不味いっスよオオオオオオ！）」

「（くくく…そんなの知ったこっちゃないわアアア…アンの販操を守る為よ…）」

「（こや、じつちかとこうとリナちゃんが狙つてる？スよね…？）」

田で会話する2人。

オレンジ頭の説得は通じなかつた様だ。

どうやら黒ボニーは、今だにシオンがアンダーソン食堂に居候している事が気に入らないらしい。

シオン、危うし…

とはならなかつた。

シオンが大剣を防ぎつつ、後方に蹴りを繰り出した。

慌てて防御するリナ。

ダガーを十字にクロスさせ、盾代わりにしたが凄まじい衝撃で後方へ8メートル近く吹っ飛ばされた。

何とか受身を取り、体勢を立て直すも　　両手からダガーを落としてその場で蹲つた。

「リナちゃん！？」

「余所見してんじゃねーわよ…あたしよりも自分を心配しろっての

！」

幼馴染の異変に、気が動転するオレンジ頭。

彼女は何時もの様な強気な態度を見せ、田の前の相手に集中をせる。

「（何つ一蹴りよ。手が痺れて動かない……）」

先ほどのシオンの蹴りは強烈で、リナの両手は痺れしまった。

その所為でダガーを落としたのだ。

今彼女は武器を握る事すらままならない。

ジョイの方も状況は芳しくない。

このままではあっせり負けてしまつ。

けど、それでは面白くない。

仮にも自分達の方が先輩にあたるのだ。

このまま黙つて……。

「負けらんないのよオ！」

地を蹴つて、天高く跳躍した。

到達したのはシオンの頭上。

真下にはあの憎らしい赤髪がいる。

彼女の選択肢は一つ。

ありつたけの意力を両足に込めて 。

「踏み倒す！」

おそらく多くの人が口を並べて、いつ斬つだらう。

空から爆弾が降ってきたと。

まさにその通り。

リナという爆弾が急降下してくる。

赤髪は目の前のオレンジ頭の大剣を防いでおり、動けない状態。

確実に直撃する 箕だった。

リナの蹴りが正にシオンの頭に届くかという瞬間、高音が響く。

シオンが左手を頭上に上げている。

掌の先には、1メートル程の光の壁が出現していた。

それは意力で構成された障壁。

一点集中同様、強度の高い壁を作るには相応の時間を要する。

赤髪はこれも一瞬でやつてのけたのだ。

驚愕。

ジョイもリナもランも。

目の前の赤髪の並外れた能力に、ただ驚愕するしかなかつた。

「 それまで」

ルカが試合終了を宣言した。

シオンは意力と障壁を消し、ジョイも大剣を退けた。

リナは障壁が消えてバランスを崩しかけるも何とか着地する。

「いいのか？まだ、10分も試合していないぞ」

「必要ないさ。 お前さん、全く本気じゃないだろ」

「試合だからな」

「そりやそつか。 最初から本気だつたら、ここつら瞬殺されるだろうし」

その言葉に背筋が凍りつく2人。

実は田の前の赤髪が手加減していたというのは薄々気付いていた。

この男の本気とはどれ程のものだろうか。

想像するだけで恐ろしくなつてくれる。

「で、結果はどうなんだ?」

「文句無し 合格だよ」

この日、アークシティの新しいセイバーが誕生した。

ルカはほくそ笑んでいた。

途轍もない逸材が来た事に。

場所は変わり、同じ南区“警備隊本部”。

警備隊。

それはセイバーと並ぶ治安維持組織。

主な仕事は街の巡回、犯罪者の捕縛とセイバーとほぼ同じ。

違う点は基本的に単独、あるいは少人数で行動するセイバーとは異

なり、大人数で行動する部隊に分かれているという点。

犯罪組織との衝突を前提として立ち向かう精銳隊。

最新鋭のバイクを駆使して活動する高速機動隊。

他にも色々あるが、その中に新たな部隊が加わる事になった。

その名も……。

「“特殊機動隊”……。ここで合つてんのか?」

1人の男が頭を搔きながら、目の前のプレートにこりめっこする。

年齢は20歳前後くらい。

短めに切つた茶髪にラフな格好。

右手に荷物袋を提げている。

どうからどう見てもこの場所には不釣合いな人間だが……。

「まあ、入つてみりや分かるか」

あまり悩まないタイプの様だ。

男はノックもせずに扉を開いた。

第6話 セイバー（後書き）

次回はシオンさんはお休みです（笑）。
新キャラが登場予定です。

第7話 新部隊、始動

街の治安維持組織 警備隊。

少數での行動を主体とするセイバーとは異なり、大所帯の部隊での行動が多いのが特徴。

しかし、それゆえに足並みを揃えてからの行動が目立ち、後手に回る事が多々見られる。

前々からその欠点を痛感していた警備隊上層部は、試験的な意味合いを兼ねて新部隊を設立する。

その名は特殊機動隊。

フットワークを軽くする為に、その人数は隊長を含めて6人という少人数で構成される。

そして、今。

6人目である最後の隊員がここに足を踏み入れた。

「ちわー。今度配属されたアスター・ラインバッツんですけど」

荷物袋を背負つた男が特殊機動隊の部署に入ってきた。

年齢は20歳そこそく。

短めに切つた茶髪にラフな格好は、とても警備隊の隊員とは思えない。

男 アスターを出迎えたのは……。

「よつこいそ、特殊機動隊へ！」

「よ、ようこいそ、特殊機動隊へ……」

警備隊の制服を纏う口りつ子2人であった。

年齢は11～12歳くらいか。

元気そうな方はツインテール。

大人しそうな方はストレートロング。

髪の色、顔立ちから何からに何まで瓜二つ。

間違いなく双子だろう。

「こいは何だ？」

「悪イ、来る場所間違えたみてえだ」

「コスプレの会場だったのか？」

男 アスターは踵を返して外に出ようとすると

が、それを阻止する者が。

何時の間にやら入り口に大柄の男が立ちはだかっていた。

「ようこそ、特殊機動隊へ」

「いや、来る場所間違えたから帰るんですけど

「安心しろ、間違つとらん」

そう言って、大男はアスターを部屋の中に押し戻す。

とんでもない馬鹿力だ。

抗えずに入られてしまったアスター。

先ほどの口達と目が合つ。

2人とも涙目だ。

これは自分の所為なのか？

ちょっと心が痛む。

そこに……。

「これでようやく全員が揃つたね。歓迎するよ、アスター・ライン
バツツくん」

奥の方から細身の青年が姿を現す。

草原を思わせる様な緑の髪を持つ、穏やかな雰囲気の持ち主。

自分とは別の意味でここには不釣合いだ。

「えーと、ここ特殊機動隊で合つてんですかね？」

「ああ、間違いなくね。私はアイザック・シユトレイン、よろしく頼むよ」

「どうも。にしても……メンバー若過ぎやしませんかね？」

「確かにね」

ここに居るのは5人。

アスター、大男、口リ2人、そしてアイザック。

大男は20代後半くらい。

口リ2人は……まあ、10代くらいか。

アイザックは20代半ば。

アスターは今年20歳になつたばかりである。

メンバー全員がこうも若いと、隊長が気になる。

話によると、メンバーは6人。

となると、まだ出でていない最後の1人が隊長に違いない。

こんな若手ばかりのメンツだ。

きっと経験豊富なベテランだと思うが……。

「アイザックさん、隊長ってどんな人ですか？」

「君のよく知っている人だよ」

「へ？」

自分のよく知る人物？

暫し、思考するが誰も思い浮かばない。

一体、誰なのか。

その答えが現れる。

特殊機動隊の入り口が開く。

「笛さん、揃つてますね？」

「！」、この声は……」

硬直するアスター。

聞こえてきた声に聞き覚えがあつた。

入つて来たのは女性。

年齢はアスターと同じ年くらい。

肩に掛かるくらいまで伸ばした桃色の髪。

歩けば大抵の男は振り向くであろう美貌。

一見すると、何処かのモデルに見えなくもない。

しかし、アスターは小刻みに震えていた。

彼女が自分によく知っている人間だから。

「ま、ママママママリイーなんで、オマーがここに居るんだよーー?」

「あー、アスターさん 私がここに隊長ですが何か?」

「帰るー!」

脱兎の如く逃げ出すアスター……が。

隊長 マリイが足払いを掛ける。

床に倒れこむアスター。

そのまま彼の腕を取り、関節を極める。

「はーなーせーー! オマーが隊長なら俺は元の部隊に戻る!」

「逃がしませんよー 満更知らない間柄じゃないんですからー」

「誤解を招く様な発言をすんじゃねえ！」

さて、ここで今回の主人公アスターについて語らせて頂こう。

アスター・ラインバツツ。

年齢は20歳になつたばかり。

出身はここアーヴィング。

父親は警備隊の隊員、母親は医者だつた。

“だつた”と過去形なのは、もう両親が居ないからである。

アスターが10歳の頃、この間の記念祭の時の様にアーヴィングでテロ事件が起きた。

セイバーは勿論の事、当然警備隊も大多数が参加。

テロリスト達との激戦が繰り広げられた。

警備隊隊員だつたアスターの父も当然その場に居た。

現場を多く経験したベテランだつたアスターの父は、的確な指示で部下達を動かし、市民の避難を実行した。

その甲斐もあり、市民の犠牲は最小限に留まつた。

だが、市民の誘導を終えて部下達と合流したアスターの父を待つていたのは 遠距離からの狙撃だつた。

仕事を一区切りした満足感からの油断があつたのかもしれない。

テロリストの凶弾がアスターの父の頭を粉々に吹き飛ばした。

誘導された市民の中には少年だつたアスターの姿もあつた。

彼は見てしまつた。

父を襲つた不幸を。

血の惨劇を。

アスターの父は死んだ。

即死だつた。

頭部を失い、地に沈んでいく父だつたものが幼い彼の瞼に焼き付いた。

父の訃報は医者だつた母の心労を激増させた。

テロで傷付いた人々の治療に専念するだけでも精神にきていのに、そこに届いた父の死。

アスターの母は仕事中に倒れてしまった。

それから1年近く病院に入院したが、体調は芳しくなかつた。

アスターが11歳の誕生日を迎えた日、母は静かに息を引き取つた。

息子を一人残して逝つてしまつ事を謝りながら。

仕事が忙しく、あまり両親に構つて貰つた経験は無かつた。

だが、両親が嫌いだつたワケじやない。

2人とも立派だつた。

少年だつたアスターは決意した。

両親の様な命を守れる人間になろうと。

両親を亡くしてから2年過ぎた頃、アスターは警備隊訓練校に入学した。

13歳から16歳までの3年間、そこで実技と座学に励んだ。

そんな彼と同期で入つた少女が居た。

名をマリイ・トライアングル。

彼女は非常に優秀で、実技座学共に好成績を修めた。

特に彼女が得意だったのが、護身術系統。

訓練の際、アスターは彼女の餌食となつた。

彼女の関節技に何度も泣かされた事か。

アスターにとつてマリイは最も苦手な相手だった。

幸いだったのは、彼女は飛び級で学校を卒業した事だ。

同期にあつといつ間に追い抜かれるのは癪だったが、毎日関節地獄に遭うのは嫌だったのでホッとした。

その後、無事卒業して警備隊に入隊。

初めて配属されたのが遠方巡回部隊
アーヴィングの外を巡回
する部隊。

街の外担当の部隊なので、当然潜伏している犯罪者と出くわす事もしばしばだ。

座学はお世辞にも優秀とは言えなかつたアスター。

反面、実技は光るものがあり、数名の犯罪者を同時に相手にして捕縛に成功する実力があつた。

正に水を得た魚の様な活躍。

4年近い勤務で、アスターの捕らえた犯罪者は100人を超えた。

順風満帆な日々を送っていたのだが……。

「アスター、本部からの辞令で別部隊へ異動だそうだ」

「え！？」

本部から急な異動要請が来たのだ。

内容は大雑把にまとめる以下通り。

- 1・近日、警備隊内で新部隊を創設する。
- 2・メンバーは6人。
- 3・アスター・ラインバッツをメンバーに推薦する。

新部隊設立。

その話は少し前から噂になっていた。

まさか自分がそのメンバーに選ばれるとは想えていなかつたが……。

今の部隊で行動するのも悪くはないが 何事も経験だ。

こうしてアスターは新たな仕事場へと赴いた。

で、現在に至る。

「ぐつ……断りやよかつたぜ。テメエが隊長なら絶対来なかつたのに……」

「あらあら、アスターさんのイ・ケ・ズ」

「アダダダダダダダダ！逆に関節を極めるんじやねえ……」

黒い笑みを浮かべながら、関節を極めるマリイ。

堪らず、床を叩くアスター。

訓練校時代の苦い思い出が蘇つてくる。

「あの、隊長。自分達も……」

「血口紹介しますー！」

「じ、血口紹介します……」

苦しむアスターに同情しつつ、話しかけてくる大男。

ロリコンビは自然体。

見てないで「イツを止めてくれよ、オイ。

心の中でそう思つアスターであつた（笑）。

「リックス・サーレン、28歳。先日まで市内巡回部隊所属であります。よろしくお願ひします」

「ハ・ハ・ハ、12歳でーす」

「ス、スピカ・ミレット、12歳です…」

「おい、待て。何で、ガキが警備隊に入れるんだよ？警備隊に入るのは最低でも16からじゃ……」

大男 リックスはともかく、何故にこんな子供が？

最もな疑問だ。

それに答えたのは我らが隊長。

「彼女達は“異能者”なんですよ」

「は？」

「本当なのですか、隊長？よく彼女達を保護出来ましたね……」

その言葉に首を傾げる。

アスターは全く、聞き覚えがない模様。

アイザックの方は驚きの表情だった。

「アイザックさん、“異能者”って？」

「簡単に説明すると、特殊な能力を持った人間の事さ」

アイザックによると、“異能者”というのは。

- 1・古来から確認されている特殊な能力を持った人間。
- 2・どんな能力を持っているかは人それぞれ。
- 3・能力は一つしか持っていない。

4・戦略的な価値から異能者狩りと呼ばれる非道な行為が行われた過去がある。

と、こんな感じだ。

つまり、この双子は特殊能力の持ち主で、警備隊で保護されている間柄らしい。

「能力ってどんなもんが使えるんだ？」

「知りたいですか？それじゃ、やりますね！」

双子の姉 ミリが田を閉じる。

何か集中してる様だ。

一体何が起きるのか？

と、

『聞こえますか？』

「うを！？頭ん中に声が聞こえてきた！？」

いきなり頭にミリの声が聞こえてきて驚くアスター。

田の前のミリは田を閉じたまま。

口を全く動かしていない。

『これが私の能力『念話』。私の知っている人なら、どんなに遠い場所でも声が頭に届くんですよ』

『便利といえば便利だが、頭に声が響くって何か気持ち悪いな……。そつちの妹の方は？』

「えつと……」

妹 スピカが部署内に置いてあつたある物を手に取る。

カッターナイフだ。

何に使うのだ？

彼女はカッターの刃を少し出し、その刃で自分の指先を少し切った。

血が少し滲み出でてくる。

「おい、何を

」

最後まで言葉を出し切れなかつた。

彼女の指の傷が、あつという間に塞がつたのだ。

自然治癒にしてはあまりに早過ぎる。

「これは……」

「『治癒』の能力です……。今のは自分に使いましたけど、他の人の傷も治せます……」

「なるほど、これが異能者つて奴の力か

この2人が保護されている理由が理解出来た。

犯罪組織なんぞに捕まれば言い様に利用されるのは目に見えている。

最悪の場合は実験動物扱いだ。

「OK、理解したぜ。ところで、確認してえんだが……やっぱ、辞退とか出来ねえのか？」

「まだそんな事言つてるんですか？」少しキツ目に技を掛けた方がいいですねえ」

ボキボキと指を鳴らすマリィ。

己の発言にちや後悔するマスター。

合掌する残る面々。

その日、1人の警備隊員の悲鳴がとある部署から延々と聞こえたと
いう（笑）。

第7話 新部隊、始動（後書き）

久々に投稿。

やはり主人公系は三枚目が一番です。
書きやすいから（笑）。

第8話 記憶を取り戻せ！

俺の名はシオン・ディアス。

現在、アークシティのセイバー・ギルドに所属する新米セイバーである。

作者が書くのが遅い所為でまだ肝心の仕事の場面が描かれてはいいないのだが……。

それは置いといて、俺は今　　凄まじく危険な状態にある。

どんな状態かといふと……。

「シオンさん、これで記憶が戻りますよ！」

「ホラ、早く飲んで」

目の前に居るのは、居候先であるアンダーソン食堂の看板娘、アンリ・アンダーソン。

俺がツツ「コミ系妹キャラの資質を見出した素晴らしい逸材だ。

もう一人はリナ・アイランス。

アンリの友人であり、俺をセイバーに誘った少女。

2人は怪しいどす黒い液体を飲めと、俺に迫っている。

視線を液体に向ける。

黒い。

とにかく黒い。

黒インクにしか見えない。

しかも、ぐつぐつと煮立つており、発せられる凄まじい悪臭が鼻腔を麻痺させる。

これを飲めと？

命の危険を感じた。

逃げたい。

逃げたいのだが。

「シオンくん、男を見せる時だよ

「旦那、ファイトっスよー！」

後方には雑貨屋ことザッシコ・シャルフイド。

オレンジ頭こと、ジョイ・レアリストが布陣していた。

おかしい。

何故、こんな展開になつた？

時刻は少し遡る。

この展開になつた発端まで

。

アークシティ西区、病院。

シオンは病院の医師と対面していた。

「先生、俺の記憶なんだが……何とか取り戻す事は出来ないか？」

「うーん、君の記憶喪失は相当重症みたいだからねえ。難しいかも
しないな」

シオン・ディアスは記憶喪失である。

記念祭でアンリを助けたあの日より以前の記憶が無い。

どこで生まれたのか？

家族は健在なのか？

何も思い出せない。

そして、もう一方で気になつていた。

記憶は無いのに、肉体が憶えている体術と意力の扱い方。
素人から見ても、シオンの戦闘能力の高さは尋常ではない。

明らかに実戦慣れしていると実感出来る。

一体、自分は何者なのだろうか。

「大体は自然回復を待つのが一番だと思うよ」

「そうか……」

大抵の答えが自然回復。

時間に任せるとしかない。

医師にそう言われたんじゃ、仕方無い。

病院を後にするシオンさんであった。

西区、雑貨屋シャルフィード。

暮らしに役立つ日用品から、珍しい調味料、怪しい品まで扱う知る人ぞ知る隠れた名店。

この店は店主が気ままな時間帯で営業しており、開店と閉店の時間が一定していない事で有名である。

「ふあ～あ……まだ寝足りないや

大きな欠伸をしながら、この店の店主 ザッシュー・シャルイフ
イドが寝室から出てくる。

寝癖でボサボサになつた髪を搔きながら、洗面所に向かう。

ふと、何やら居間の方から音が聞こえてくる。

どうやらテレビから流れてくる音楽や声の様だ。

「あれ? テレビ切るの忘れたかな?」

訝しがりながら、居間の扉を開く。

ちやぶ台の上に湯気の立つた湯飲みが置かれていた。

いい香りだ、新茶に違いない。

テレビにはどこか遠くの風景が映っている。

「おお、起きたか。邪魔してるぞ」

ちゃぶ台の周りに敷かれた座布団。

その一つに座る男が一人。

病院帰りの赤髪 シオン・ディアスであった。

湯飲みを手に取り、ずずつと啜る。

「つむ、いい味だ」

「あ、いいでしょ？ やつぱ新茶は美味しいよね？」

「同感だ。それはそつとまづ顔を洗つてくるといい。後、歯磨きもな」

「はーー……つて違うでしょ？ アアアアアアアアアアアー！」

ザツシユの攻撃！

スキル“ちゃぶ台返し”発動！

ちゃぶ台がシオンに襲い掛かる！

しかし、シオンは躲した！

シオンは不敵な笑みを浮かべている。

「なかなかのツツコミだ。やるな、雑貨屋」

「褒められても嬉しくないわ！何勝手に入ん家のもの扱つてんの！？どつから入つて来たのオオオオオオ！？」

すつと指差す赤髪。

その先に視線を向ける雑貨屋。

視線の先には破壊された裏口の扉が転がっていた。

「イヤホンを押しても出いらんから、裏口から入らせて貰つた」

「器物破損の上に不法侵入！？」

破壊された裏口の扉の前で頭を抱える雑貨屋。

赤髪は、そんな事も気にせず立ち上がる。

少し歩き、近くのタンスの中からせんべいを取り出す。

パリッといい音が聞こえ、せんべいは赤髪の胃の中に入つていく。

「美味しいな、コレ。今度来た時も食おう

「何せんべい置いてる場所知つてんのオオオオオオオ！？」

小一時間後。

座布団に座る赤髪と雑貨屋。

雑貨屋が急須で赤髪の湯のみにお茶を注ぐ。

そして、次に自分の湯飲みにも注いだ。

互いに茶を啜る。

「はあ……疲れた。で、何の用?」

「実は、俺の記憶についてなんだが

「記憶?あーそういうえば、フィリップさんから君が記憶喪失って聞いてたっけ。それで?」

「病院で医者には自然回復に任せるのが一番と言われたが、やはり気になつてな。そこで店長に相談したら……」

店とフライップ・アンダーソンがカウンター席にお茶を出す。

カウンターに居るのは居候」とシオン・ディアス。

「記憶の回復ですか？」

「ああ、少しでいいから思い出したいんだ。何かいい方法は無いか？」

「そうですねえ、いつも時はザッショくんのお店に行っていてはいつも
でしょ?」

「雑貨屋の店に? 奴が何かいい方法を知ってるのか?」

「彼の店には色々な物がありますからねえ。まあ、行つて損は無い
ですよ」

「どうワケでここに来た

「どーこうワケだよ……。しかし、記憶の回復か……方法が無く

もないけど

げんなりしながら、ザツシュはタンスまで行ってゴソゴソと何かを探している。

やがて、タンスの中からあるモノが取り出された。

どす黒い液体が入った瓶。

赤髪の頬に、汗が伝った。

何だ、これは ?

見るからに怪しいシロモノ。

いやいや、これインクか何かではないだろうか。

とりあえず聞いてみる。

「雑貨屋、俺はツツコミを入れられるのが大好きだ。ライフワークと言つてもいいくらいだ」

「こきなり何言つてんの君は?」

「だが、今回はあえてツツコミに回らせてもう。そのあからさまに黒インクにしか見えん液体は何だアアアアアアアアー?」

「記憶が戻るかもしない液体」

「“かもしれない”とは憶測か……。飲んでも記憶が戻る保証は無

いんだな？」

「さあね？ 実は誰にも試した事が無いんだよ。君が最初の挑戦者」

「帰る」

立ち上がり、店を後にしようとする赤髪。

しかし、後方からガシッと肩を掴まれた。

掴んだのは言わずもがな雑貨屋。

いい笑顔だ。

目は全く笑っていないが。

おそらく、裏口を壊された事を根に持っているのだろう。

「シオンくん、裏口の弁償はいいからコレ飲んでよ。そしたらチャラにしてあげるからや」

「絶対に断る。必ず弁償するから勘弁してくれ」

記憶を取り戻したい。

だが、命も惜しい。

そこに。
。

「おつ邪魔」

「ここにまでは」

「ういっス！」

突如訪れる来訪者。

黒ボニーことリナ・アイランス。

居候先のアンリ・アンダーソン。

ついでにオレンジ頭ことジョイ・レアリスト。

顔見知りの3人だった。

「オレだけついで扱い！？」

「何言つてんのよアンタ？」

「えーと、調味料買いに来たんだけど……。シオンさん、どうしてここに？」

「おや、いらっしゃい。実はシオンくんの記憶を取り戻す方法を教えていてね」

「だから、いらんと言つていろ。俺は帰る」

「記憶を取り戻す？なら、手つ取り早い方法があるじゃない」

黒ボニーに何か提案があるらしい。

やたらと自分を敵視する傾向があるので、助け舟などはない
そう思っていた赤髪。

だが、今は感謝する。

雑貨屋の勧めるあのワケの分からん液体を飲むよりはマシな方法に
違いない。

……と、思ったのだが。

彼女は何を握り、構える。

何か それは金属で出来た棒。

よく野球とかで使う棒。

俗に言ひ金属バットだった。

でも、普通の金属バットじゃない。

やたら釘とかが刺さっている。

しかもよく見ると何か赤いモノが付着している。

「……オイ、ちょっと待て。何のつもりだ? 記憶を取り戻す方法じ
やないのか?」

「え? だからコレがその方法。コレで頭ふつ叩くのよ。いわゆるシ
ヨック療法つてヤツ」

「それに付着しとる赤いモノは何だ？」

「ジヒイの血。前に着替えを覗こうとしたからこれでフルボッコにしたのよ」

オレンジ頭に視線を向けるシオンちゃん。

けど、オレンジ頭は遠い方を見ていた。

何か小刻みに震えている。

ああ、なるほど。

アレで殴られた時の事を思い出してるのか。

「うつやら彼のトライアゴリシ」。

「そんじゃいくわよ~」

「ぶんぶんどバシトを振り回す黒ボニー。

流石に後ずさる赤髪。

あんなんで記憶が戻るワケがない。

それ以前に三途の川を渡るかもしけない。

「いや、待て。いくらなんでもそんな方法で戻るワケ……」

「死ねエエエエエエエエエエエエエエ！」

「おい、待て！殺す気かアアアアア！？」

「記憶なんぞなんぼのもんじゃーい！アンタの抹殺が目的よオオオ
オオオオオ！」

やはり、自分の抹殺が目的だった黒ボーグ。

赤髪は鳥に追つた危険に対し、一も以上に感覚を研ぎ澄ます。

破き潰された感覚は、毎感は危険を察知

示暑の反応速度を升温度に高め力

莫力東

居間のちやぶ台が粉碎される。

アロも真っ青なスイング。

赤髪は右に避ける

テレビが木つ端微塵に。

「テレビまでええええええ！」

バットにあつたたけの力を込めて放つ突き。

跳躍して回避。

後方についたタンスが全壊。

タンスの中身が周囲にブチ撒ける。

18歳未満の良い子は見てはいけない本が沢山。

「イヤアアアアアア、僕の秘蔵本が～～～！～～～！」

「あ、兄貴！ソレ見せて欲しいっス！～！」

「ジヨイくん、こんな時に……」

「君ら、あの2人止めてよ！～？」

秘蔵本の閲覧をせがむオレンジ頭。

呆れるアンリ。

2人の仲裁を頼む雑貨屋。

破壊される雑貨店で、不毛な争いが勃発してから約30分後

。

アンリの説得で、僅か0・01秒という速度で破壊活動を停止した

黒ボニー（笑）。

荒れた居間を少し片付け、新しいちゃぶ台が設置された。

そこに置かれる湯飲み。

「というワケで、当初の予定通りコレを飲んで貰つよ」

湯飲みの中にはあの黒い液体。

「ゴボゴボと、嫌な音を立てている。

しかも途轍もない悪臭が漂う。

「おい、本当に大丈夫なのかコレ？」

「だから君が最初のチャレンジジャーだつて。ちなみに逃げても無駄だから。逃げたら、コレをフィリップさんに渡して君の食事の中に入れて貰うだけさ」

「くつ……どうしても俺を殺したいらしいな」

「旦那、大丈夫っスよー鼻揃んで飲めば少しはマシになるっス！！」

「根本的な解決になつとらんわアアアア！」

以上によつて、現在の危機的状況にあるのだ。

記憶を取り戻すのに、どうしてこんな日に遭わなければならんのだ
……。

心の底からそう思つ赤髪。

しかし、逃げても食事に混ぜられる可能性がある。

ならば、やる事は一つ。

飲む、死を覚悟して。

湯のみに口を付け、一気に呷る。

瞬間。

赤髪の頭の中に未知の世界が広がつた。

大きな翼を広げて、大空を飛ぶ巨大生物。

腰蓑を付けて、片手に槍を持つて逃げる動物を追う原住民らしき人々。

数百メートルはあろう巨体で、街を破壊する巨大ロボ。

そこは正にカオスワールド。

この世のものとは思えない光景が広がつていた。

まあ、要するに幻覚を見ているワケですが。

そのままぶつ倒れる赤髪。

「あ～やつぱダメだつたかあ」

「「」んなモン飲んだりそりや倒れるつスよ……」

「お約束過ぎね」

「と、とつあえず毛布か何か掛けてあげよー。」

それよりも医者を呼べ、アンリよ（笑）。

「（……ん？）」

シオンが瞼を開く。

そこは雑貨店ではない。

血の匂いが漂う場所。

周囲には何十という数の人間の成れの果て
た。

死体が転がってい

地獄。

そうとしか言いようの無い光景。

何故、自分はこんな場所に居るのだ？

「(何だ、) いいよ……? アンリ達は何処に……」

悲鳴！？」

遠くから聞こえて来る悲鳴に反応し、駆け出す。

行けども行けども死屍累々。

常人なら、小一時間も持たずに嘔吐するだろう。

走り抜いて、辿り着いた場所。

そこでは惨劇が繰り広げられていた。

1人の男が逃げ惑う者を容赦なく殺戮している。

その男
見るからに常人とは思えない風貌の持ち主だった。

見た目は20代前半くらいか。

面白い、まるで雪の様に白い髪。

そして その男を危険だと思わせる最大の要素。

目だ。

男の目は明らかに常人のものとは違つた。

どす黒い色をした眼球と、まるで血を連想させる様な真つ赤な瞳。

異形の男を見た瞬間、シオンの身体が硬直した。

恐怖ではない。

「（あの男、あの目 何処かで見た事がある。何処だ、一体何
処で ッ…）」

蹲り、頭を押さえる。

凄まじい頭痛がシオンの頭を襲う。

何かを思い出そうとしているのか。

だが、意識が霞む。

異形の男の姿が見えなくなる。

「（お前は誰なんだ ）」

その疑問の答えを聞く事も出来ず、意識は途切れた。

「ツー。」

大量の汗を流しながら、身を起こす。

周囲には自分を囲う様にアンリ達の姿が。

「お、ようやく起きたね。隣されてたみたいだけど、大丈夫かい？」

「……氣分は最悪だ。あんなワケの分からん劇物を口にした所為で
な」

「悪い夢でも見てたんですか？」

「夢、か。まあ、悪夢といえば悪夢かもしけんが……」

「ひょっとして過去の夢とか？」

過去。

そう言われて、少し顔が強張った。

あながち間違いでは無いかもしね。

夢に出てきた異形の男には何かを思い出せそうな要素があつたのだから。

「あの黒い液体。もしかしたら本当に記憶を回復させる効果があつたのかもしかんな。……効果は微々たるものだがな」

「え、マジー？ いや、まさか本当に効くとはね～」

「微々たるものだ。もう飲まん。自然回復に身を任せた方が安全だ」

「そりや残念。まあ、毎回ぶつ倒れられても困るしねえ」

残念そうに両手を擧げる雑貨屋。

苦笑するアンリ達。

そんな彼等を尻目に、シオンは考えていた。

夢の光景。

あれだけの犠牲者が出た事件があつたのか。

あの異形の男は何者なのか。

「（今度、図書館か何かで調べてみるか）」

暗闇の中、2人の男が対面していた。

片方がもう一人に写真を渡す。

「残念だが、この男の素性は分からなかつた」

「そうですか……」

「しかし、何者だこの男は？『リスト』の情報網にも引っ掛からん
とは……」

「もしかしたら……」

「もしかしたら、なんだ？」

「生きているという事実を抹消せられてはいる”かもしません
ね”

「ますますキナ臭いものを感じるな　　この男」

写真に写る男。

赤い髪に青い瞳の男。

シオン・ディアスその人だつた。

第8話 記憶を取り戻せ！（後書き）

今回せやや呼めに書けました。

次回は何時になるやら（汗）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3420v/>

RED

2011年11月12日19時50分発行